

第108図 試料採取地点(試料番号と採取地点の関係は表3参照)

スガヤ、ハイイスガヤがあるが区別が困難なのでイヌガヤ属としておく。

- 5) スダジイ *Castanopsis cuspidata* var. *Sieboldii* (MAKINO) NAKAI 試料番号: p-9, 31, 56
年輪に沿って中庸の道管が単独で並んでいる環孔材で、孔圈外道管は火炎状配列を示し、道管穿孔は單穿孔。放射柔細胞は単列できわめて低い同性放射組織型であることなどからスダジイとした。

- 6) アカガシ亜属 *Quercus (Cyclobalanopsis)* sp. 試料番号: p-5, 6, 8, 14, 19, 22, 37

中庸の道管が単独で配列する放射孔材で、道管穿孔は單穿孔。軸方向柔細胞は、1ないし数細胞由の独立帶状柔組織を示すことが多い。放射柔細胞は単列できわめて低い同性放射組織型のものと複合放射組織があることなどから、アカガシ亜属とした。アカガシ亜属にはいくつかの種が存在するが、区別が困難なのでアカガシ亜属としておく。

- 7) コナラ節 *Quercus (Sect. *Prinns*)* sp. (1試料) 試料番号: p-41

年輪に沿ってやや大きい道管が単独で並んでいる環孔材で、孔圈外道管は火炎状配列を示す。道管穿孔は單穿孔。放射組織は単列できわめて低い同性放射組織型のものと複合放射組織があることなどから、コナラ節とした。コナラ節にはコナラ、ミズナラなどのいくつかの種が存在するが、区別が困難なのでコナラ節としておく。

- 8) エノキ属? cf. *Celtis* 試料番号: p-16, 21, 38, 40

年輪に沿って中庸から小さい道管が単独で並んでいる環孔材で、孔圈外道管は、斜状の配列を示す。道管穿孔は單穿孔で小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射柔細胞は、異性で、1~2例できわめて低いものと、3~7例で非常に低いものがあり、多列のものにはさや細胞が存在することなどから、エノキ属と考えられる。しかし孔圈道管の径が小さいことなど、不確定要素もあり確定はできない。

- 9) ニレ属? cf. *Ulmus* 試料番号: p-35

年輪に沿ってやや大きい道管が単独で並んでいる環孔材で、孔圈外道管は塊状に集合している道管穿孔は單穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射柔細胞は同性で、1~2列できわめて低いものと、3~7列で非常に低いものがあることなどからニレ属と考えられる。しかし孔圈道管の配列が十分に観察できないことから、確定はできない。

10) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino 試料番号: p-51

年輪に沿ってやや大きい道管が1～2列並んでいる環孔材で、孔圈外道管は塊状に集合して斜状の配列を示す。道管穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射柔細胞は異性で、1～2列できわめて低いものと、3～7列で非常に低いものがあることなどから、ケヤキと考えられる。

11) ヤマグワ *Morus bombycis* Koidz. 試料番号: p-2

年輪に沿ってやや大きい道管が並ぶ環孔材で、孔圈外道管は数個集合して散在状の配列を示す。道管穿孔は単穿孔でチロースがあり、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射柔細胞は異性で、1～3列できわめて低いものと、4～7列で非常に低いものがあることなどから、ヤマグワと考えられる。

12) ツバキ属 *Camellia* sp. 試料番号: p-11, 13, 15, 20, 30, 36, 46

非常に小さい道管が多くは単独で、あるいは2個複合し、均一に分布する散孔材で、道管穿孔は多孔穿孔で、段階穿孔板の段階数は20程度である。放射柔細胞は単列のものと、比較的高い単列部を持った2～3列のものがある。極めて低い異性放射組織型である。また、単列部に結晶細胞が見られることなどから、ツバキ属とした。ツバキ属には、ヤブツバキ、ユキツバキ、サザンカなどがあるが比較標本がないため、ツバキ属としておく。

13) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. 試料番号: p-18

非常に小さい道管が多くは単独で、あるいは2個複合し、均一に分布する散孔材で、道管穿孔は多孔穿孔で、段階穿孔板のbarは間隔が狭く、時に大変多い。放射柔細胞は単列で、ごくまれに2列になる部分がある極めて低い異性放射組織型であることなどから、サカキとした。

14) ヒサカキ属 *Eurya* sp. 試料番号: p-3, 27, 39, 42, 43, 44, 45, 48, 52, 53, 54

非常に小さい道管が多くは単独で、あるいは2個複合し、均一に分布する散孔材で、道管穿孔は多孔穿孔で、段階穿孔板のbarは間隔が狭く、時に大変多い。放射柔細胞は単列のものと、2～3列のものがある、極めて低い異性放射組織型であることなどから、ヒサカキ属とした。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあるが比較標本がないため、ヒサカキ属としておく。

15) リンボク *Prunus spinulosa* Sieb. Zucc. 試料番号: p-17

非常に小さい道管が、塊状で斜状に配列する散孔材で、道管穿孔は半穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射柔細胞は単列のものと、4～5列で極めて低い異性放射組織型であるなどから、リンボクと同定した。

16) ユズリハ属? cf. *Daphniphyllum* 試料番号: p-33

小さい道管が単独で、均一に分布する散孔材で、道管穿孔は多孔穿孔で、段階穿孔板のbarは間隔が狭く、多い。放射柔細胞は1～2列で低い異性放射組織型である。また、単列のもの一部には、直立細胞のみからなるものがあるなどから、ユズリハ属と同定した。ユズリハ属にはユズリハ、ヒメユズリハがあるが、互いによく似ており、区別が困難なのでユズリハ属としておく。

6. 古墳時代前期の植生について

従来の花粉分析結果から、宍道湖周辺地域では弥生時代初頭から奈良時代にかけてはイネ科花粉帯・スギ亜帯（以下スギ亜帯と省略）に位置づけられており、アカガシ亜属とスギが優占する時代であるとされている（大西ほか、1990）。タテチョウ遺跡では従来より花粉分析が実施されてきたが、考古学的に堆積年代の推定が行われた堆積物の花粉分析は実施されていなかった。このため、今回考古学的に得られている堆積時期である古墳時代前期の花粉組成は、タテチョウ遺跡では明らかではない。

今回の分析結果から考えられる遺跡周辺の植生は、タテチョウ遺跡においてスギ亜帯に属するとされた花粉分析結果（大西・渡邊、1987b）と大きくは変わらない。しかし、花粉分析で得られる明確な照葉樹林要素がアカガシ亜属、シノキ属だけであるのに対し、今回の樹種鑑定ではこれらのほか、ヒサカキ属、ツバキ属、サカキ、リンボクなどが確認できた。しかしこれらはいずれも照葉樹林の主要な構成要素であり、島根半島に現存する自然林（松村、1987）のほとんど群落に該当する可能性を持つ。このため、松村（1987）の7群集のいずれに属する林がタテチョウ遺跡周辺に存在したかを決定する要因にはならなかった。

針葉樹のモミ属、イヌガヤ属は、枕木山の350～400mに残るヒメアオキーウラジロガシ群集（松村、1987）の構成種（モミ、ハイイヌガヤ）である。しかし今回の結果では、ヒメアオキーウラジロガシ群集の表数種であるヒメアオキ（アオキ属）が検出されておらず、現存のヒメアオキーウラジロガシ群集の林がタテチョウ遺跡周辺に存在したか否かは不明である。

西川津遺跡の材化石鑑定結果ではスギは検出されていなかった（大西ほか、1988）。しかし、同時代の花粉分析結果ではスギ属の花粉化石は10～20%程度検出されており（大西・渡邊、1987a）

朝駒川下流でのスギ属の分布が予想されていた(大西ほか, 1988)。今回、西川津遺跡の下流にあるタテショウ遺跡で時代が異なるものの、スギの材化石が検出されたことにより、スギ属は朝駒川の下流あるいは、下流で合流する支流沿いに分布していたと考えられる。

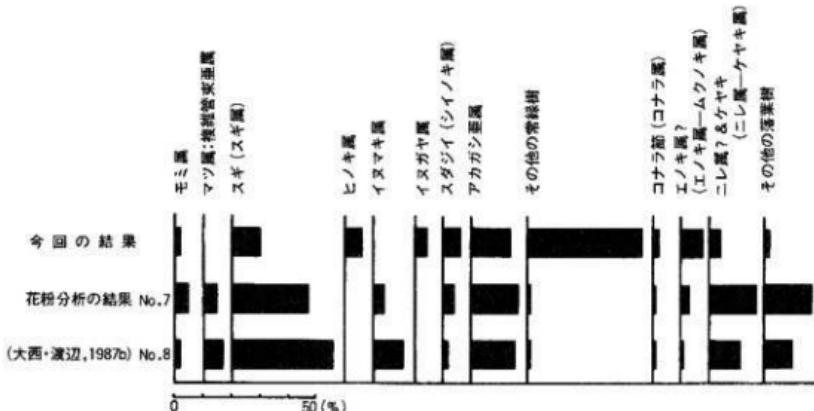
7.まとめ

松江市のタテショウ遺跡より出土した、落木と考えられる材化石の樹種同定をした結果、古墳時代前期の植生について、以下のことが言えた。

- 1) ヒサカキ、ツバキなど、この時代の花粉分析では従来検出できなかった種類を含む12分類群の広葉樹と、スギを含む4分類群の針葉樹が確認された。
- 2) 古墳時代前期の朝駒川流域には、照葉樹林が繁茂していたと考えられる。枚村(1987)の7群集にてらした場合、ヒメアオキーウラジロガシ群集が存在した可能性がある。
- 3) 弥生時代～古墳時代前期に花粉分析で優占しているスギの分布範囲は、朝駒川の下流部で合流する谷沿いであると考えられる。

8.謝辞

天理大学附属参考館学芸員金原正明氏には広葉樹の樹種鑑定の確認をしていただいた。今回の研究をまとめるにあたりここに厚く感謝の意を表したい。



第109図 材化石の出現率と花粉化石の出現率の関係(古墳時代前半)

*材化石、花粉化石が共に検出する場合は、分類名を材化石名(花粉化石名)で表す。
どちらか一方が検出する種類は検出する化石の分類名で表す。

第3表 タテチョウ遺跡出土材化石一覧表

試料番号	位置	種類	試料番号	位置	種類
p-1	Ⅵ	モミ属	p-30	Ⅳ	ツバキ属
p-2	Ⅵ	ヤマグワ	p-31	Ⅳ	スダジイ
p-3	Ⅵ	ヒサカキ属	p-32	Ⅳ	ヒノキ属
p-4	Ⅵ	スギ	p-33	Ⅳ	ユズリハ属?
p-5	Ⅵ	アカガシ亞属	p-34	I	ヒノキ属
p-6	Ⅵ	アカガシ亜属	p-35	I	ニレ属?
p-7	II	スギ	p-36	I	ツバキ属
p-8	II	アカガシ亞属	p-37	II	アカガシ亞属
p-9	II	スダジイ	p-38	II	エノキ属?
p-11	II	ツバキ属	p-39	II	ヒサカキ属
p-12	II	スギ	p-40	V	エノキ属?
p-13	II	ツバキ属	p-41	V	コナラ節
p-14	II	アカガシ亜属	p-42	V	ヒサカキ属
p-15	II	ツバキ属	p-43	IV	ヒサカキ属
p-16	II	エノキ属?	p-44	IV	ヒサカキ属
p-17	II	リンボク	p-45	IV	ヒサカキ属
p-18	II	サカキ	p-46	IV	ツバキ属
p-19	II	アカガシ亞属	p-48	V	ヒサカキ属
p-20	II	ツバキ属	p-49	V	ヒノキ属
p-21	II	エノキ属?	p-51	V	ケヤキ
p-22	II	アカガシ亜属	p-52	V	ヒサカキ属
p-23	II	スギ	p-53	VI	ヒサカキ属
p-24	II	イヌガヤ属	p-54	II	ヒサカキ属
p-27	V	ヒサカキ属	p-55	IV	イヌガヤ属
p-28	V	スギ	p-56	VI	スダジイ

位置は第108図の番号

文献

- 内田律雄, 1987 : 植物遺体. 朝鶴川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書 一Ⅲ一 (海崎地区), 264, pl.136.
- 大西郁夫, 1974 : 花粉の分析. 朝鶴川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書 一Ⅰ一, 188-193.
- 大西郁夫・渡邊正巳, 1987 a : 西川津遺跡(83)の花粉分析. 朝鶴川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書 一Ⅲ一 (海崎地区), 252-261.
- 大西郁夫・渡邊正巳, 1987 b : タテチヨウ遺跡の花粉分析. 朝鶴川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書 一Ⅲ一, 219-223.
- 大西郁夫・渡邊正巳, 1987 c : 松江市西川津町, タテチヨウ遺跡の花粉分析. 山陰地域研究(自然環境), no.3, 109-120.
- 大西郁夫・渡邊正巳・内田律雄, 1988 : 松江市, 西川津遺跡の材化石. 山陰地域研究(自然環境), no.4, 65-80.
- 大西郁夫・原田吉樹・渡邊正巳, 1988 : 松江市, 西川津遺跡の花粉分析. 山陰地域研究(自然環境), no.5, 45-54.
- 大西郁夫・大谷英之, 1990 : タテチヨウ遺跡「88」の花粉分析. 朝鶴川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書 一Ⅲ一, 本文編, 434-436, pl.72.
- 粉川昭平, 1974 : 出土種子類の観察. 朝鶴川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書 一Ⅰ一, 180-187, pl.72.
- 大西郁夫, 1990 : タテチヨウ遺跡出土の植物種子. 朝鶴川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書 一Ⅲ一 本文編, 430-433.
- 小林弥一, 1975 : 本邦における針葉樹材のかべ式識別法. 林業試験場研究報告, no.98, 1-84, pl.1-16.
- 島地 謙・佐伯 広・原田 広・塩藏高義・石田茂男・重松頼生・須藤彰司, 1985 : 木材の構造. 文永堂, 276p. 東京.
- 島根県教育委員会, 1979 : 朝鶴川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書 一Ⅰ一, 島根県教育委員会, 204p.
- 島根県土木部河川課・島根県教育委員会, 1987 : 朝鶴川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書 一Ⅲ一, 島根県土木部河川課・島根県教育委員会, 237p.
- 島根県土木部河川課・島根県教育委員会, 1990 : 朝鶴川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書 一Ⅲ一 本文編, 島根県土木部河川課・島根県教育委員会, 482p.
- 島根県土木部河川課・島根県教育委員会, 1992 : 朝鶴川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書 一Ⅲ一, 島根県土木部河川課・島根県教育委員会, 241p.
- 桃村直則, 1987 : 島根半島の植生と植物相-1. 残存自然林-1. 山陰地域研究(自然環境), no.3, 35-42.
- 鈴木三男・能代修一, 1985 : 千葉市村田服部遺跡(古墳時代前期)出土木材の樹種. 今沢大教養科学紀要, vol.22, 11-69.
- 鈴木三男・能代修一, 1986 : 新保遺跡出土加工木の樹種. 新保遺跡II弥生・古墳時代大溝偏一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書 第10集 本文編, 71-94, pl.3-19.
- 須藤彰司, 1959 : 本邦産広葉樹材の識別(識別カードを適用して). 林業試験場研究報告, no.118, 1-138, pl. 1-36.
- 能代修一・鈴木三男, 1987 : 中里遺跡出土木材遺体から推定される古植生. 東北新幹線建設に伴う発掘調査中里遺跡2, 253-320.
- 渡邊正巳, 1987 : 西川津遺跡より出土した縄文時代早期末~前期初頭の形木製品について. 朝鶴川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書 一Ⅲ一 (海崎地区), 262-263, pl.135.
- 渡邊正巳, 1988 : 松江市西川津遺跡出土の木製品について. 朝鶴川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書 一Ⅲ一 (海崎地区), 244-260, pl.78-81.

- 渡邊正巳。1990：松江市タテチョウ遺跡出土木製品の樹種の記載—その1— 朝顔川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書—Ⅱ— 本文編、458-462, pl.202-203.
- 渡邊正巳。1992：松江市タテチョウ遺跡出土木製品の樹種の記載—その2— 平成2, 3年度調査での出土木製品 朝顔川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書—Ⅲ— 本文編、241, pl.83.

第Ⅷ章 原の前遺跡・西川津遺跡Ⅱ区の範囲確認調査

朝酰川上流の海崎橋付近から下流に広がる西川津遺跡は、1980年から1984年にかけて発掘調査が行われ、縄文～平安時代に及ぶ多くの遺物・遺構が検出された。一方、加羅加羅橋下流のタテチヨウ遺跡についても発掘調査後、川幅の拡幅工事が進んでいる。このため、学園橋から加羅加羅橋にかけての部分の川幅が最も狭くなり、流れが滞る傾向が見られた。ここは、西川津遺跡Ⅱ区の一部と原の前遺跡と呼ばれる遺跡が存在することが知られており、1989年に原の前遺跡右岸について範囲確認調査が行われている。島根県土木部河川課と協議を重ねた結果、原の前遺跡左岸と更に上流の西川津遺跡Ⅱ区について、遺物包含層の有無等、今後の調査実施についての基礎資料を得る目的で1991年9月2日から10月16日までの間、遺跡の範囲確認調査を行った。

1. 範囲確認調査の概要

原の前遺跡左岸は、現状では旧朝酰川と現朝酰川に挟まれた中洲状を呈しており、その中洲状になった部分は宮尾橋で一旦切られた後、上流の西川津遺跡Ⅱ区まで続いている。この部分は、川替えを行った際に掘削した廃土を積み上げており、最高所では標高約2mを測った。また、宮尾橋から学園橋にかけての西川津遺跡Ⅱ区右岸は遊水地確保の為に既に表土部分の掘削が行われており、標高約1mの平坦面になっていた。

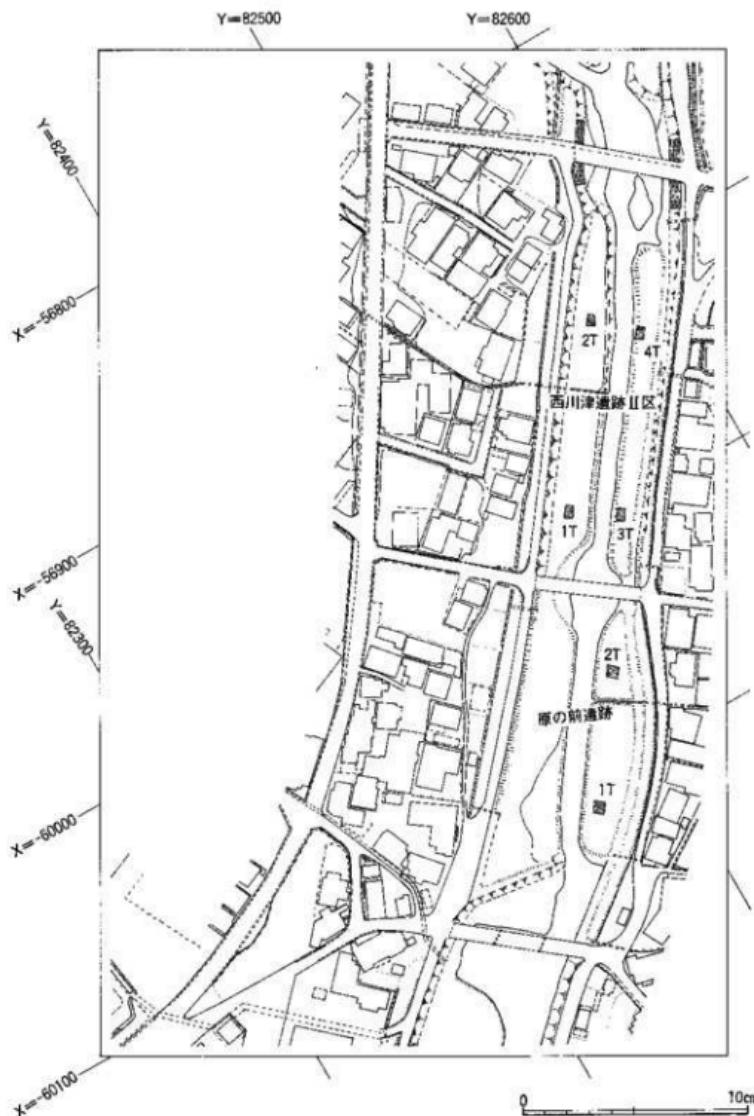
調査は一辺5mの方形区画を設定することとし、原の前遺跡左岸は、中洲状を呈する部分に2カ所を、西川津遺跡Ⅱ区は、両岸に各2カ所を設定した。各調査区の呼称は、原の前遺跡は下流の調査区から第1トレンチ、第2トレンチと呼び、西川津遺跡Ⅱ区は右岸下流の調査区から第1トレンチ、第2トレンチ、左岸上流の調査区を第4トレンチとした。

(1) 原の前遺跡

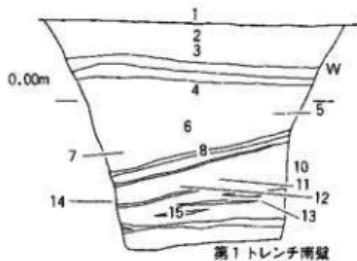
2カ所の調査区とも上層の状況はほぼ同様で、標高1m付近より縄状に砂層を挟んだ粘質土が厚く堆積している。標高-2m付近からは人頭大の礫を含んだ砂礫層が5~15cmの厚さで2面にわたって堆積している。粘質土層は全体に大きく東に傾いており、旧河道の影響が考えられる。砂礫層からは多量の遺物が出土した。

(2) 西川津遺跡Ⅱ区

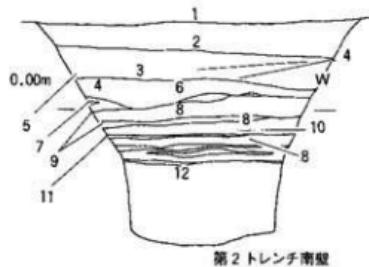
右岸側は、粘質土が厚く堆積しており、標高-2m付近に見られる砂礫層は10cmほどの厚さしか



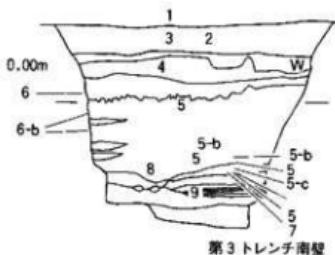
第110図 検査区配置図 (1 : 2500)



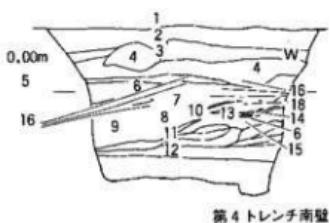
1. 赤褐色粘質土(礫を含む、耕作土)
2. 棕色粘質土(多量の砂を含む、耕作土)
3. 黑褐色粘質土
4. 灰褐色粘質土
5. 明青灰色砂層(植物質を含んでいる)
6. 灰褐色粘質土(河道内埋土)
7. 明青灰色砂層(植物質を含まない)
8. 灰褐色粘質土(河道内埋土)
9. 棕色の植物質の層
10. 棕色粘質土(植物質を含む)
11. 棕色粘質土(植物質を少量含む)
12. 明青灰色砂層(植物質を含まない)
13. 青灰色砂層(植物質を含む)
14. 灰褐色粘質土(河道内埋土)
15. 青灰色砂層(非常に細かい砂状の粘土)



1. 赤褐色粘質土
2. 棕色粘質土
3. 灰褐色粘質土(砂を含む)
4. 青灰色砂層
5. 灰褐色粘質土
6. 灰褐色粘質土(黑色粘質土をしま状に含む)
7. 青灰色砂層(4に似るがやや明るい)
8. 灰褐色粘質土(6に似る)
9. 茶色粘質土(植物質)
10. 青灰色砂層(7に似る)
11. 灰茶色粘質土
(植物質を非常に多く含む、状の堆積面)
12. 暗灰色粘砂層



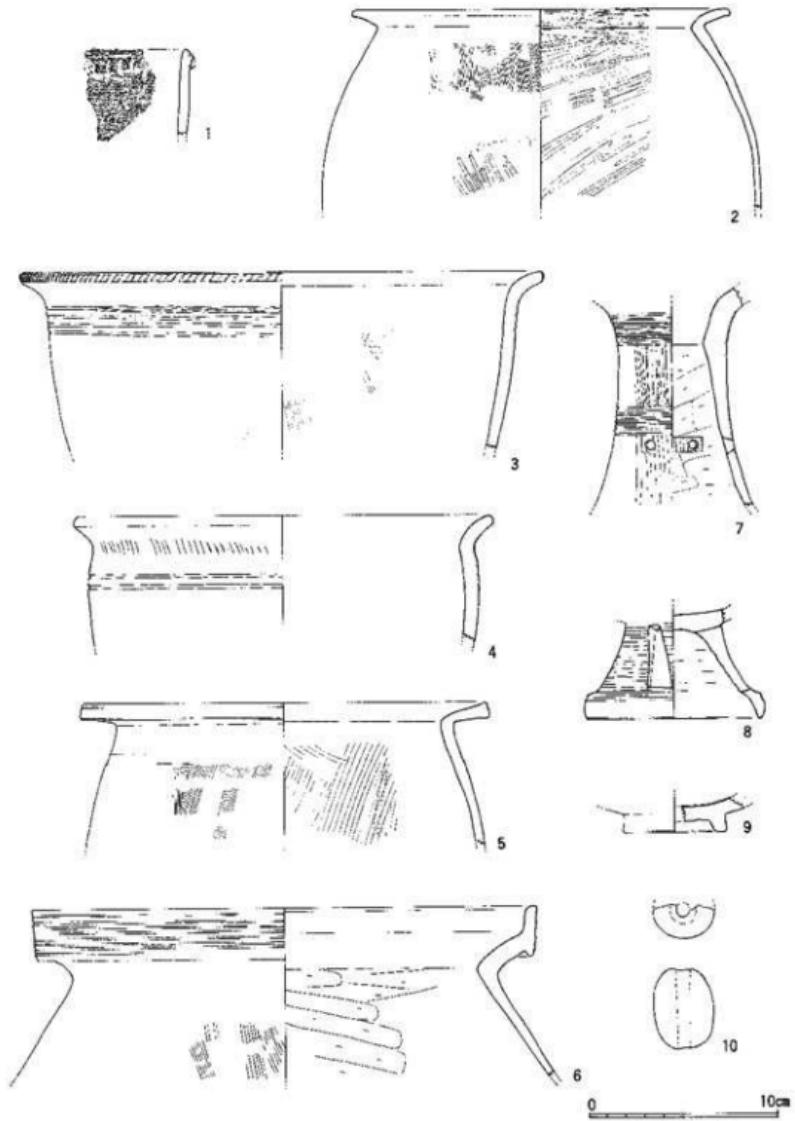
1. 棕色粘質土
2. 灰褐色粘質土
3. 灰色粘質土
4. 灰色粘質土(細砂を含む)
5. 茶褐色粘質土(木根を含む)
- 5-b. 茶褐色粘質土(細砂を塊状にわずかに含む)
- 5-c. 茶褐色粘質土(中程度の粉粒を多く含む)
6. 灰色砂層
- 6-b. 灰色粗砂層(茶褐色粘質土を含む)
7. 暗青灰色砂層
8. 暗青灰色砂層
9. 棕色粘質土



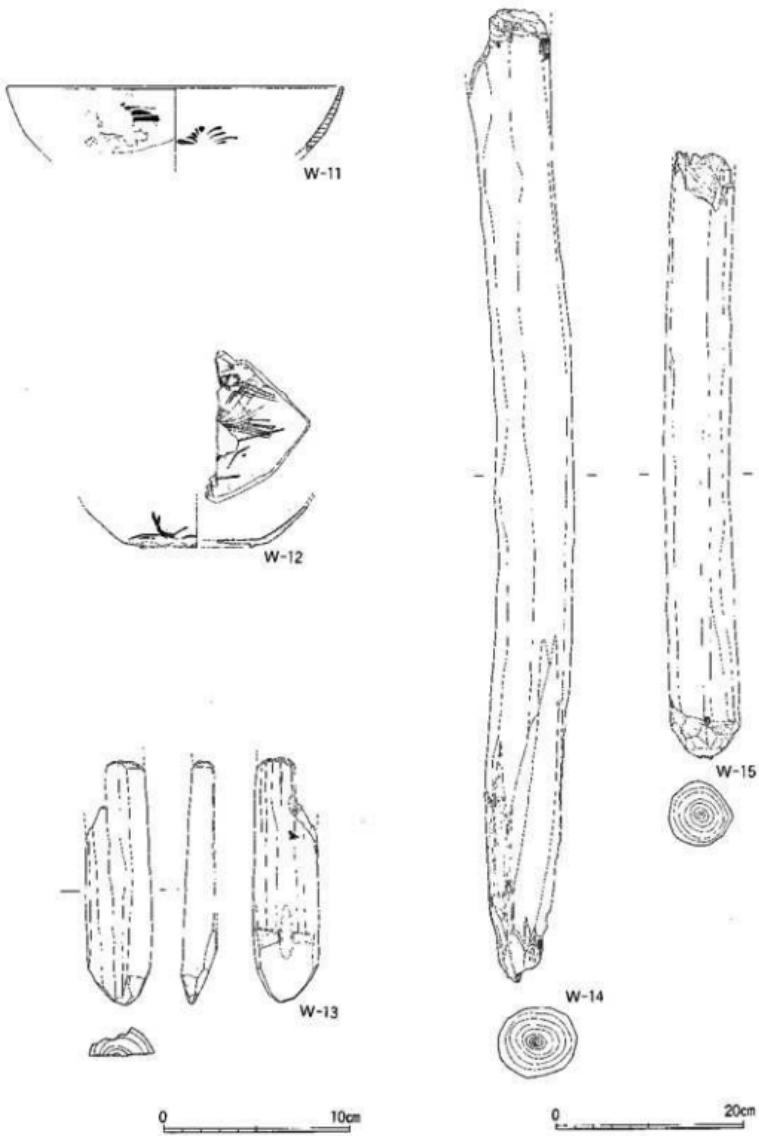
- | | |
|----------------------|---------------------------------|
| 1. 黄褐色粘質土 | 11. 灰色砂層 |
| 2. 茶褐色粘質土 | 12. 緑灰色粘質土
(鉱質の砂を含む) |
| 3. 灰色粘質土 | 13. 暗茶褐色粘質土
(より暗い) |
| (植物質を含む) | 14. 茶褐色粘質土
(灰色細砂層を塊状に含む) |
| 4. 灰色粘質土
(細砂を含む) | 15. 青灰色砂層 |
| 5. 灰色砂層 | 16. 植物質の堆積(木質) |
| 6. 暗茶褐色粘質土 | 17. 茶褐色粘質土
(植物質の堆積物を塊状に含む) |
| 7. 黄褐色砂層 | 18. 明灰色砂層
(細砂、繊状の粘土層をわずかに含む) |
| 8. 灰褐色砂層
(やや粉粒が大) | |
| 9. 青灰色砂層 | |
| 10. 灰色砂層 | |

第111図 西川津遺跡II区土層断面図 (1:80)

0 2m



第112図 原の前遺跡、西川津遺跡II区出土遺物実測図(1) (1 : 3)



第113図 原の前遺跡、西川津遺跡Ⅱ区出土遺物実測図(2) (1:3)

見られない。遺物は原の前遺跡に比べ少ない。また、第2トレンチの標高-1m付近の粘質土中からは杭が出土しており、旧河道に関係する遺構が存在する可能性がある。

左岸側は、原の前遺跡より高い標高-1.5m付近に砂礫層が見られ、遺物を多量に含んでいる。また、第4トレンチでは-1m付近に砂層及び砂礫層があり、遺物は比較的少ない。土層が東に傾いており旧河道の影響が考えられる。

2. 出土遺物

原の前遺跡第2トレンチ、西川津遺跡Ⅱ区第3トレンチの砂礫層を中心に多量の遺物が出土し、一部を図示した（第112・113図）。弥生土器を中心に、縄文から古墳時代までの遺物が見られ、更に新しい遺物も若干含まれるようである。

112-1は突帯文をもつ縄文土器で、縄文時代晩期のものであろう。条痕文土器等も見られ、更に古いものも存在するようである。弥生土器（112-2～7）はほぼ全期を通じて見られる。112-9は、青磁碗で、底部の小片である。113-2・3は、原の前遺跡第1トレンチの上層から出土した木製碗であるが、この土層は、川替えを行った際の掘削土と思われ、擾乱土からの出土である。また、113-4・5の杭は、先端の加工が不明瞭で、タテチョウ遺跡出土のものとは印象が異なる。

3. まとめ

今回の範囲確認調査では西川津遺跡Ⅱ区第2トレンチ以外のすべての調査区で、遺物包含層が確認された。また、西川津遺跡Ⅱ区第2トレンチでも、杭が出土しており、遺構が存在する可能性が高い。以上の事から、周辺には同様の遺物包含層が広がっていることが予想され、全面調査が必要と考えらえる。

原の前・西川津出土遺物観察表

器種	通 告 号	出土地点	層 位	高 度 (cm)	形態・文様の特徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調・小取	備 考
漆 筒	第112回 1	89 西川津Ⅲ区 1T	青灰色 砂礫層		口縁部外面のやや下がった位置に、斜目を持つ馬頭突帯	内外面共ナデ	胎土:白色及び透明な小砂粒を含む 焼成:良好 色調:灰褐色	
甕	第112回 2	89 西川津Ⅲ区 3T	青灰色 砂礫層	H径 20.3	瓶底が「く」の字状に大きくなっています。	体部外面は上方をハケ日、下方はヘラミガキ。内面はヘラミガキ	胎土:透明な微砂粒を含む 焼成:良好 色調:灰褐色～暗褐色	外面に炭化物が付着している
甕	第112回 3	89 西川津Ⅲ区 3T	青灰色 砂礫層	H径 28.1	口縁部が粗く片刃へラ状工具による4~5条の平行沈線文、ヘラによる刻目	一括にハケ日	胎土:2~3mmの大いやや大型の砂粒を多く含む 焼成:良好 色調:灰褐色～暗褐色	
甕	第112回 4	89 原の前 1T	青灰色 砂礫層	H径 22.0	口縁部が粗く外反へラ状工具による2条の平行沈線文	ハケ日の後荒いナデにより調整。瓶部附近にハケ日の痕跡	胎土:1~2mmの大いやや大型の砂粒を含む 焼成:良好 色調:灰褐色	
甕	第112回 5	89 西川津Ⅲ区 3T	青灰色 砂礫層	H径 21.6	口縁部がわざかに粗く、2重口等。口縁部は直立	ハケ片の後荒いナデを施す	胎土:1mm以下の小砂粒を含む 焼成:良好 色調:乳白色	
甕	第112回 6.	89 原の前 2T	青灰色 砂礫層	H径 27.0	瓶底が「く」の字状に粗直、二重口等。口縁部は直立 8条のくし道と沙綾	体部外面にはハケ日、内面に頭頂まで削り	胎土:1~2mmの大いやや大型の砂粒を多く含む 焼成:良好 色調:灰褐色～暗褐色	
壺 不	第112回 7	89 西川津Ⅲ区 3T	灰色 粘土上		瓶底中央部でやや斜めに粗い沙綾を施す。ほか所の沙綾は細く、瓶底の砂綾はヘラで平行沈線文を施す。内面は頭頂まで削り	外面はヘラミガキ、内面に削っている		
壺 不	第112回 8	89 原の前 2T	青灰色 砂礫層	底径 9.0	比較的低い肩部で、肩端部は大きく張り出す3方に方形容の透孔を持つ		胎土:白色の小砂粒をわずかに含む 焼成:良好 色調:灰褐色	TK208併行
瓶	第112回 9	89 原の前 1T	拂士中	底径 5.4	高さの小片、高台は斜面で、高台の側面は粗く、瓶底の砂綾が全体で半のそれと同程度となる	直筒外削と高台付近は削り、透明度の高い緑色の胎土に入れる	胎土:白色の小砂粒をわずかに含む 焼成:良好 色調:灰褐色	
土 罐	第112回 10	89 西川津Ⅲ区 3T	青灰色 砂礫層	H径 0.7 底径 4.3 高大径 2.2	貯糞孔式土罐。立筒長椭円形	ていねいなナデによる成形	胎土:1mm前後の白色砂粒を含む 焼成:良好 色調:灰褐色～暗褐色	
瓶	第113回 11	90 原の前 1T	青灰色 粘砂層	H径 17.8	赤色顔料(赤らるし)を使用	全面うるしを使用	木取:横木地	113-W12と同一個体であろう
瓶	第113回 12	90 原の前 1T	青灰色 粘土上	底径 6.1	赤色顔料(赤らるしか)を使用	全面うるしを使用	木取:横木地	
不明	第113回 13	90 原の前 2T	青灰色 砂礫層	長さ(12.9) 幅 3.5 厚さ 1.8			木取:板目	
杭	第113回 14	90 西川津Ⅲ区 2T		長さ104.5 幅 8.7 厚さ 7.4			木取:芯持	
杭	第113回 15	90 西川津Ⅲ区 2T		長さ(65.4) 幅 6.9 厚さ 6.7			木取:芯持	

第X章 まとめ

以上、今までに1990年度、91年度のタテチョウ遺跡発掘調査の概要について説明したが、今回の調査をもって、タテチョウ遺跡についての発掘調査が終了したことになる。朝霧川河川改修工事に伴う発掘調査は調査開始以来15年（予備調査を含めると18年）が経過し、朝霧川流域の遺跡の実態が次第に明らかになりつつあるが、ここでは今回の調査を中心にタテチョウ遺跡について説明し、まとめとする。

堆積状況について

今回の調査で判った点は、タテチョウ遺跡の遺物包含層はすべて河川堆積層であったと言う点である。前回の調査に続き、今回の調査でも4本の旧河道を確認した。このうち河道3は1988年度の第2河道につながるものであろう。また、河道2からはしがらみ状遺構や杭列等の遺構が確認されたが、いずれも河道内での検出であり、陸地化した部分については、その後の河川の影響のためか遺構は検出できなかった。

前回の報告では、タテチョウ遺跡出土弥生土器が西川津遺跡出土のものと接合したことにより、西川津遺跡から流入したもののがかなり含まれているものと推定した。^{註1}しかし、今回の調査では、上流の西川津遺跡に近付くほど遺物の量が少くなり、遺物包含層も薄くなっている。木製農耕具はほとんど出土しなかった点も、今回の調査の特徴的な点である。1988年度調査で多量に出土した木製農耕具は、今回の調査では、ミカン割り材を含めても5点しか出土していない。以上の点から考えるとタテチョウ遺跡で出土する遺物の大部分はタテチョウ遺跡周辺の比較的近い地点からの再堆積で、上流の西川津遺跡等から若干の流入があったものと考えるに至った。

出土遺物について

今回のタテチョウ遺跡の調査では縄文から平安時代にかけての多くの遺物が出土した。縄文・弥生土器類については、弥生時代終末から古墳時代前半期にかけて、畿内の影響を受ける土器が多く見られたことが注目される。

石器類についてはその所属時期を明らかにできないため、各時期の組成や石材の違いについて詳細な検討を加えることができなかった。

木製品は遺跡が湿潤な場所に位置するため、多量に出土しているが、石器類同様に所属時期を明らかにできないものが大半であった。以前の調査で多量に出土した木製農耕具は、今回の調査では

ほとんど出土していない。前回までの調査では、未成品も含め多量の農耕具が出土しており、また、鍬に対して、鋤の割合が少ないと指摘されてもいたが、今回の調査で明確に農耕具と呼べるもののが鋤しか見られなかった点も注意される。

一方、金属遺物については、遺跡が混潤のために残りにくいが、河道3からは平安時代に属すると考えられる鉄斧の痕跡を確認している。この時代の工具類の出土は県内でも珍しいもので、その特徴的な形態を確認したことにも含め意義深いと言える。

獣骨類は前回までの調査に比べ出土量が少なく、魚類・鳥類の出土は見られなかった。確認したものについてはシカとイノシシが大半を占めたが、この他には、平安時代に埋没したと考えられる河道3からウシが出土している。ウシは前回の調査でも出土しているが、この時代の出土は決して多いものではないと言うことであり、良好な資料を得ることができたと考えている。^{註2}

また、珪藻遺骸分析による古環境の推定については今回も行い、年々資料が増加しており、川津地域の地形の復元が年々確かなものになりつつある。

1991年度調査では、植物遺体を多量に含む河道4を検出した。河道4については、その出土遺物から古墳時代前半期に埋没したことが推定され、古墳時代前半期の環境・植生を推定するうえで貴重な資料を得ている。河道4から出土した植物遺体については、無作為に抽出し、樹種鑑定を行っている。

從来タテヨウ遺跡は縄文・弥生時代を中心とした遺跡と考えられてきており、事実、今回の調査でもそれらが出土遺物の大半を占めている。しかしながら、その時代にタテヨウ遺跡が陸地化していた状況は見られず、付近からの流入による河川堆積層であることが判明した。また、河道3や1988年度調査の第1・第2河道の状況により、古代から中世にかけての、タテヨウ遺跡周辺が陸地化した後の状況が若干判り始めたことが意義深い成果と言えることができる。弥生時代については、木製農耕具の未製品が多く出土することから生産地としての集落の存在が推定されるが、古代から中世のタテヨウ遺跡の状況は、むしろ消費地としての様相を示すものであり、朝鈴川流域の陸地化の様子を思わせるものとなった。

現在の発掘調査は、土器研究のみが先行しがちであるが、今後は自然科学的研究による地形・自然環境の復元や文献史学による遺跡周辺の歴史的地理的環境の復元を含めて、この地域の歴史的空間を、よりトータルにとらえていく努力をしていかなければならない。

註1 『タテヨウ遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 島根県教育委員会 1990年

註2 金子浩昌 「タテヨウ遺跡第3次調査出土の脊椎動物遺体」 『タテヨウ遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 1990年

図 版



タチヨウ遺跡近景(南から)



タチヨウ遺跡遠景(南から)

図版 2



河道 1 完掘状況(東から)



河道 1 土層断面(南から)



河道 2 検出状況(北東から)



河道 2・3 土層断面(南から)



河道 3 完掘状況(南西から)



河道 3 土層断面(南から)



河道 4 検出状況(南から)



河道 4 完掘状況(西から)

図版 6



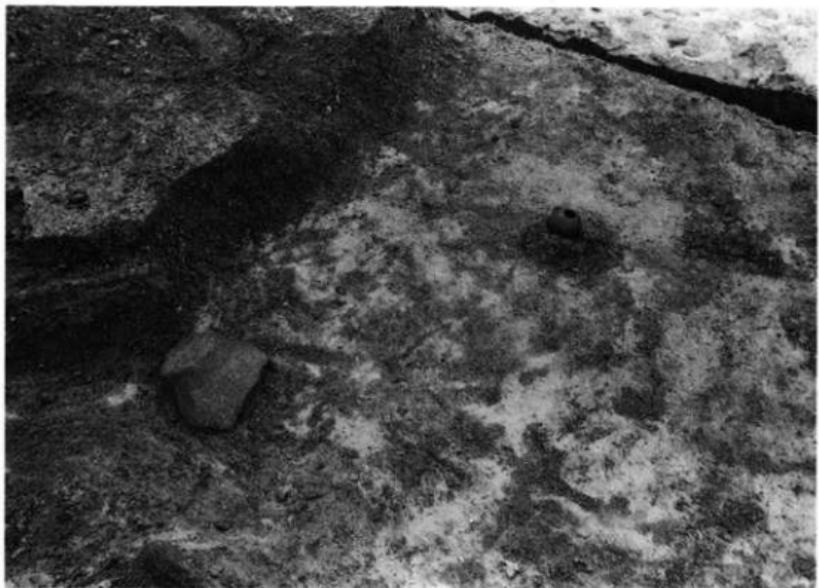
河道 4 土層断面(西から)



1991年度第Ⅰ調査区東壁(西から)



1991年度第Ⅱ調査区東壁(西から)



遺物出土状況(土笛)

図版 8



遺物出土状況(アカトリ状木製品)



遺物出土状況(土師器)



しがらみ状遺構検出状況(東から)



しがらみ状遺構付近土層断面(北から)

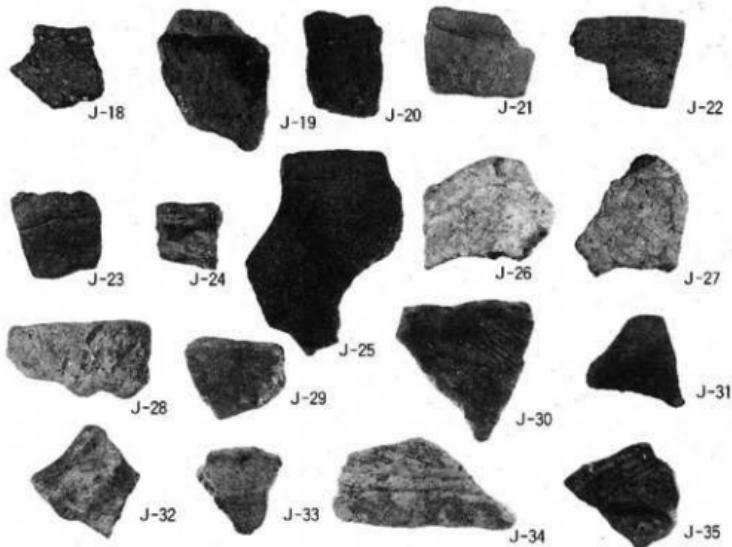
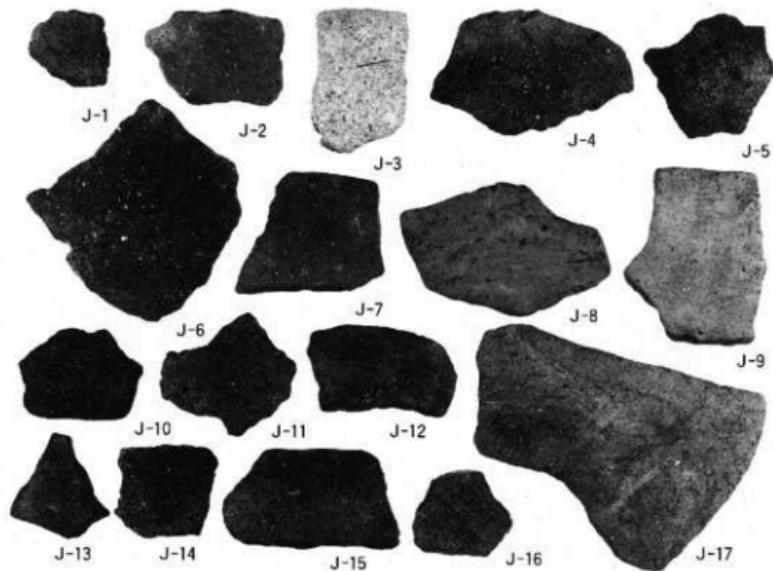
図版10



1990年度調査区完掘状況(北から)

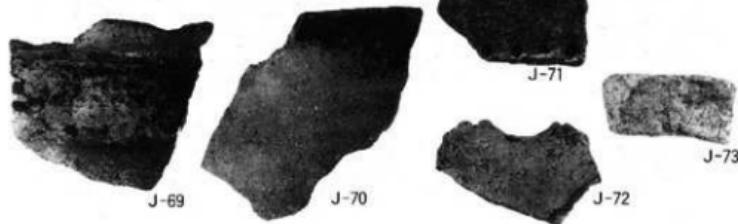
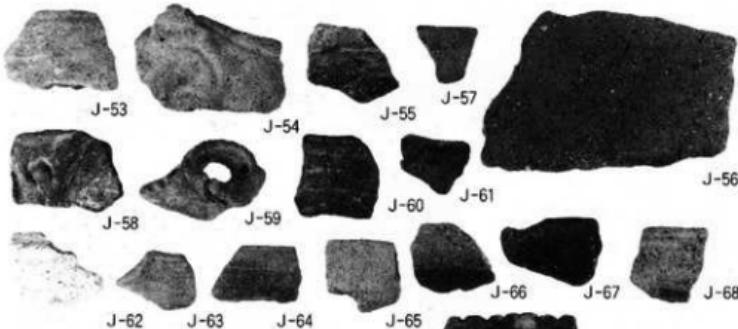
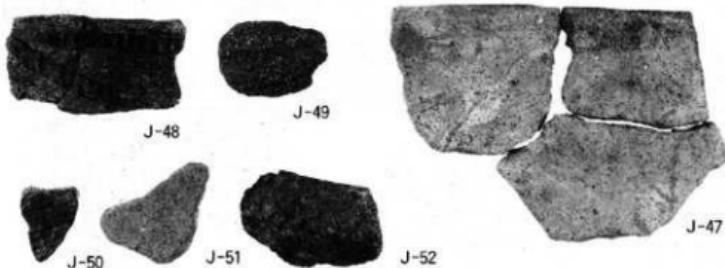
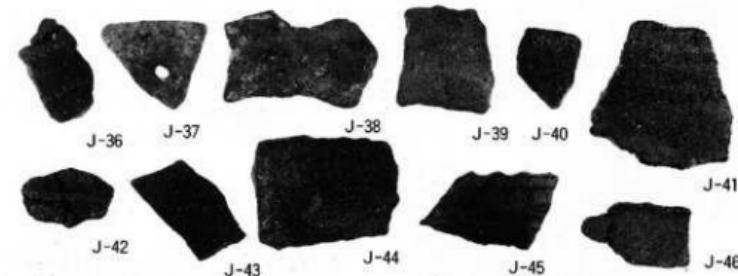


1991年度第Ⅰ調査区完掘状況(南から)

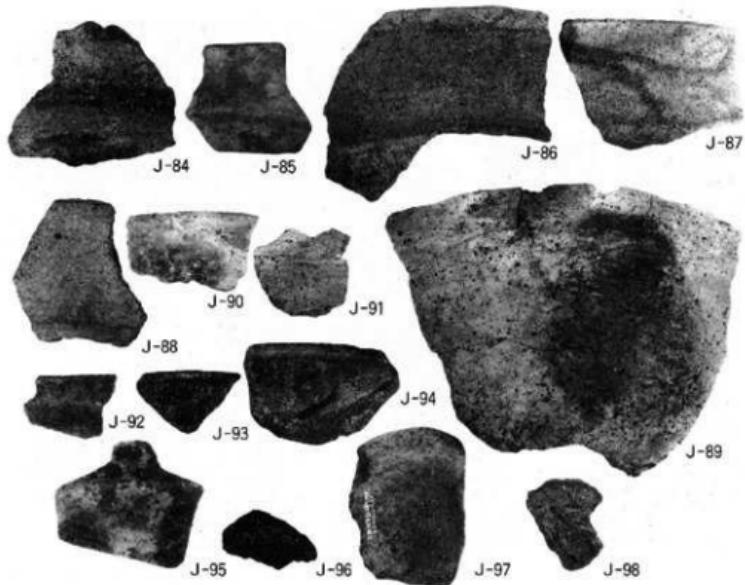
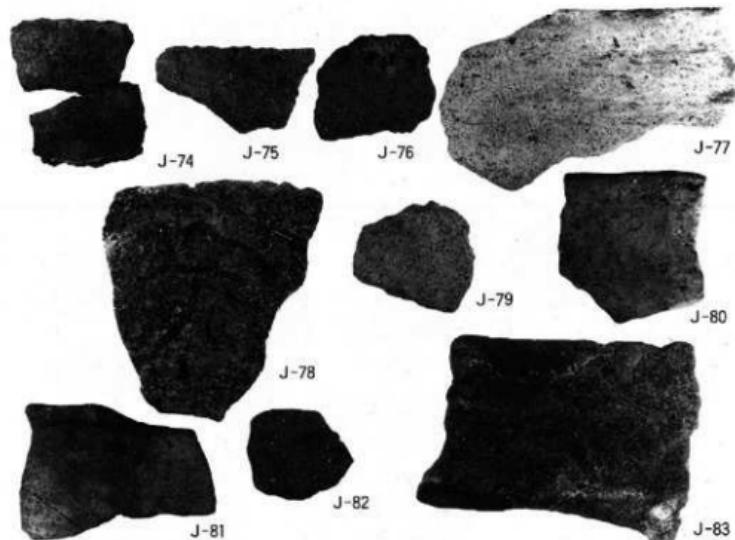


縄文土器

図版12

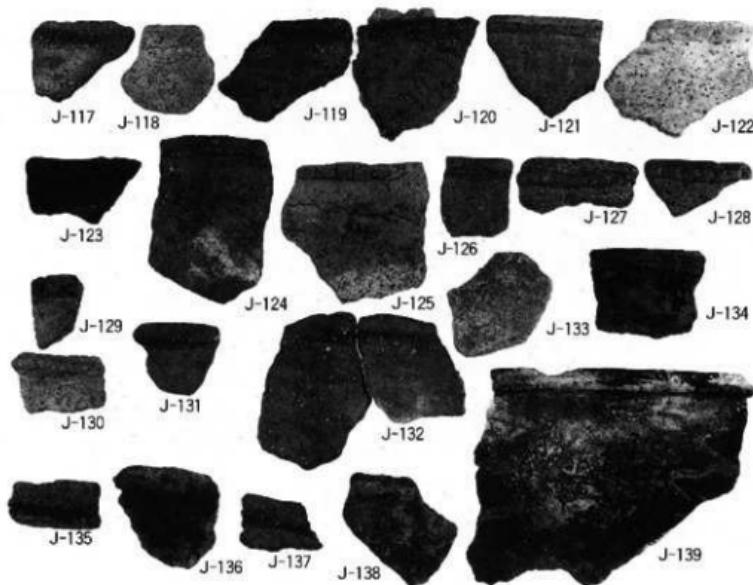
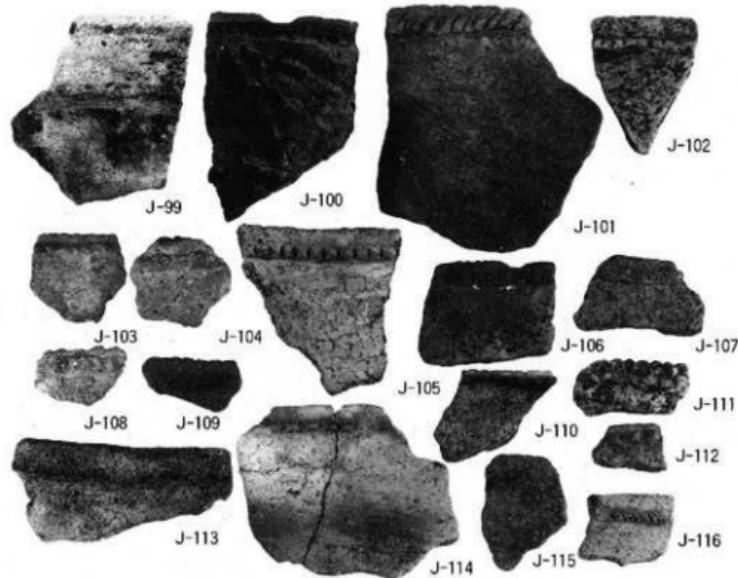


縄文土器

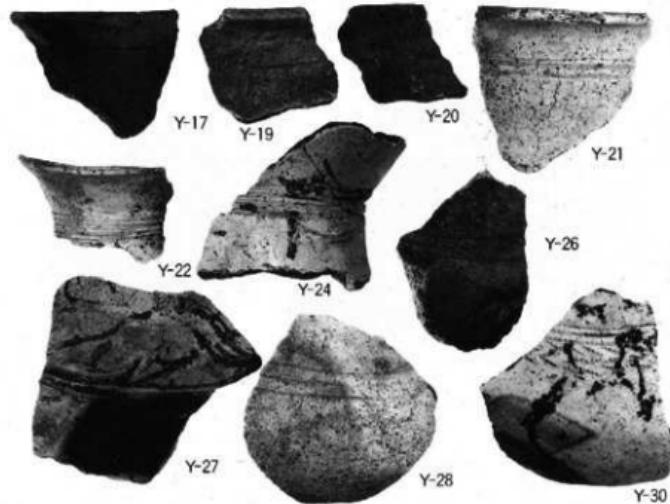
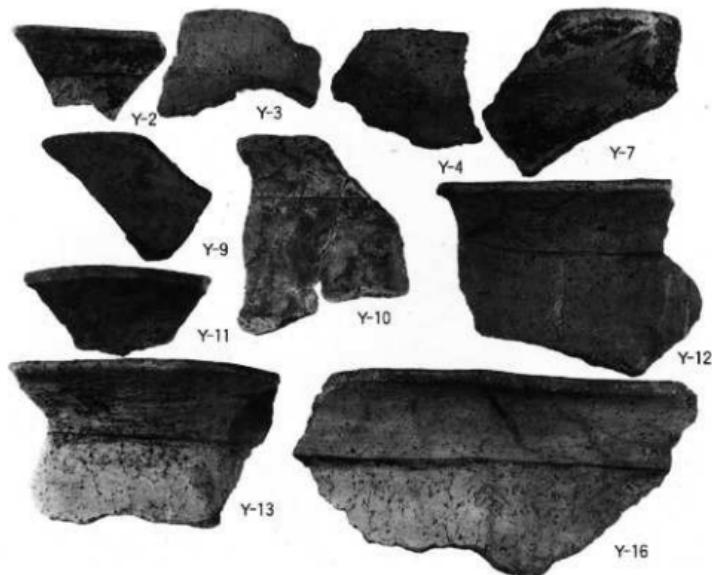


縄文土器

図版14



縄文土器



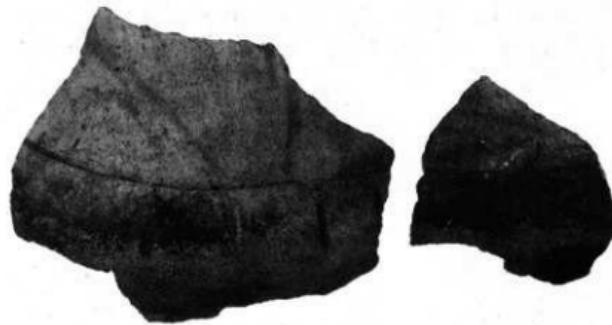
弥生土器(壺)



Y-23

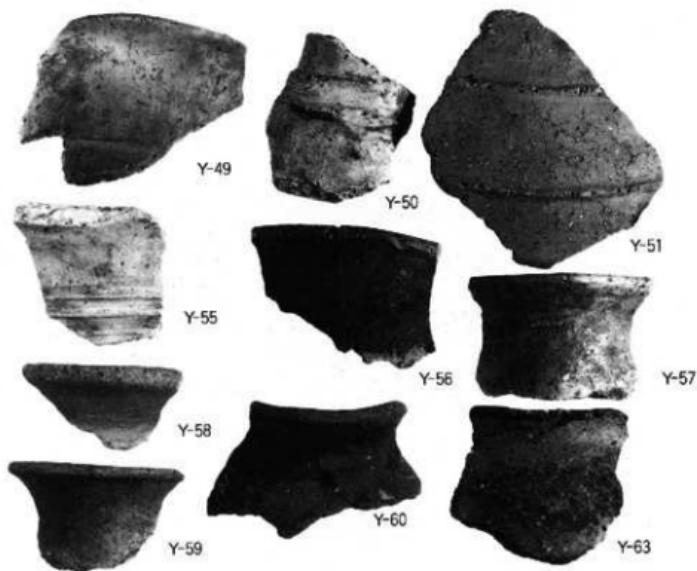
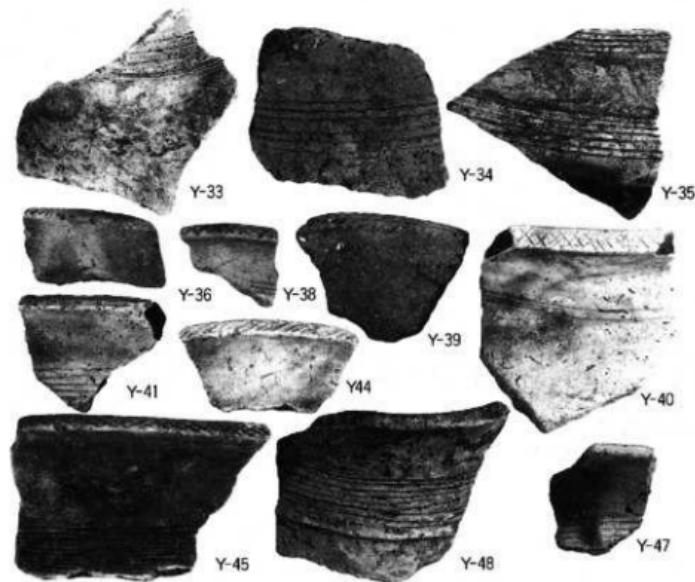


Y-31



Y-25

弥生土器(壺)



弥生土器(壺)



Y-53



Y-53



Y-52

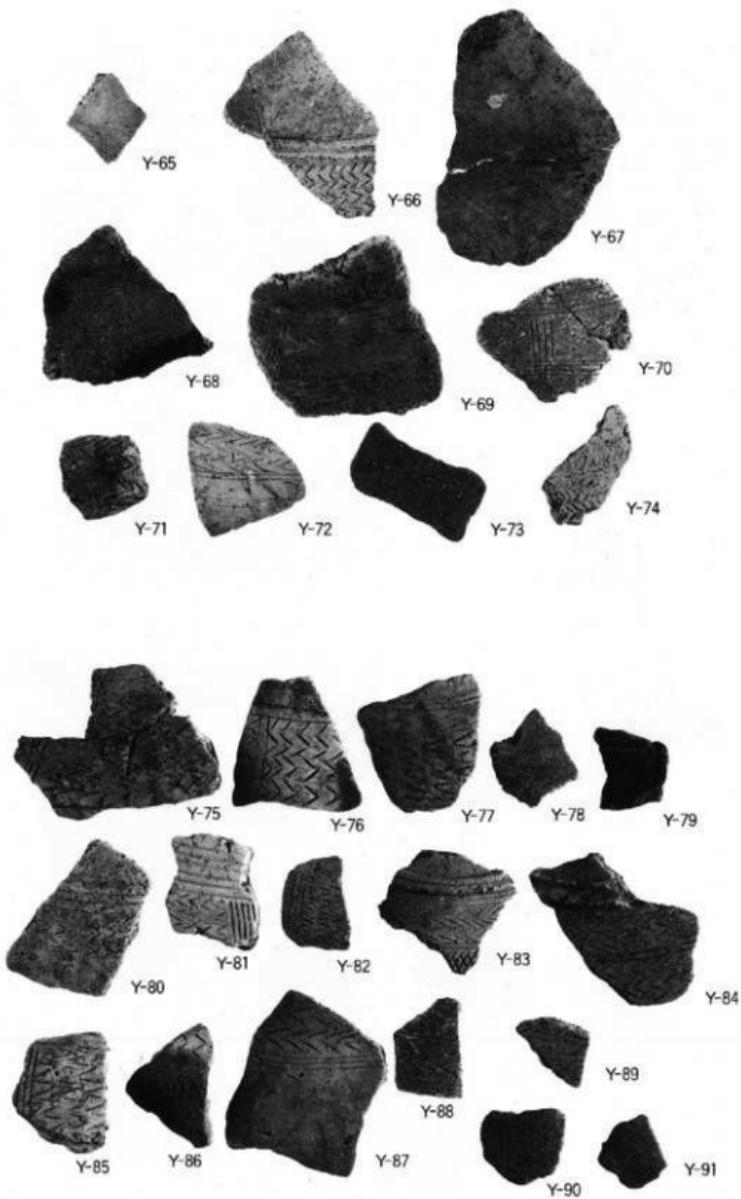


Y-54

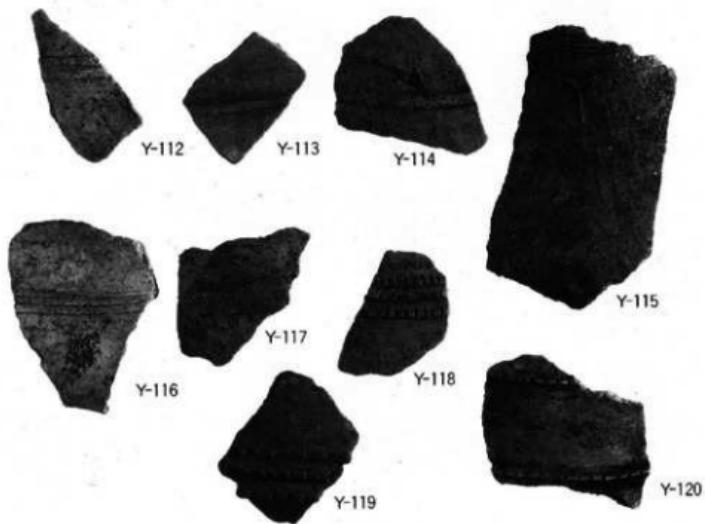
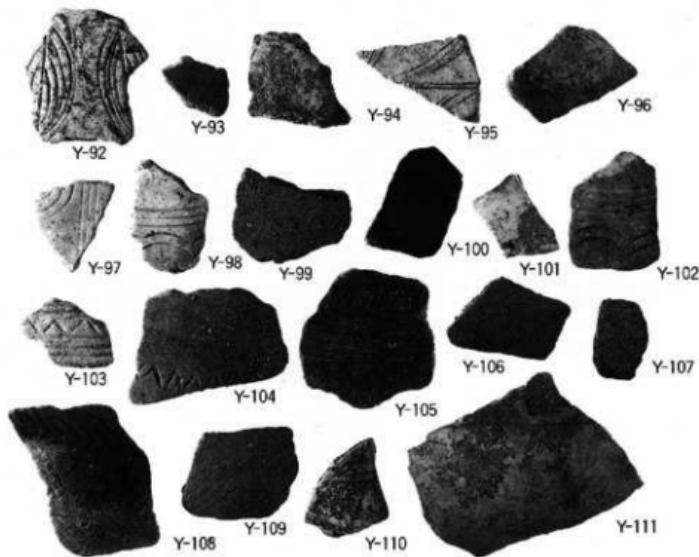


Y-64

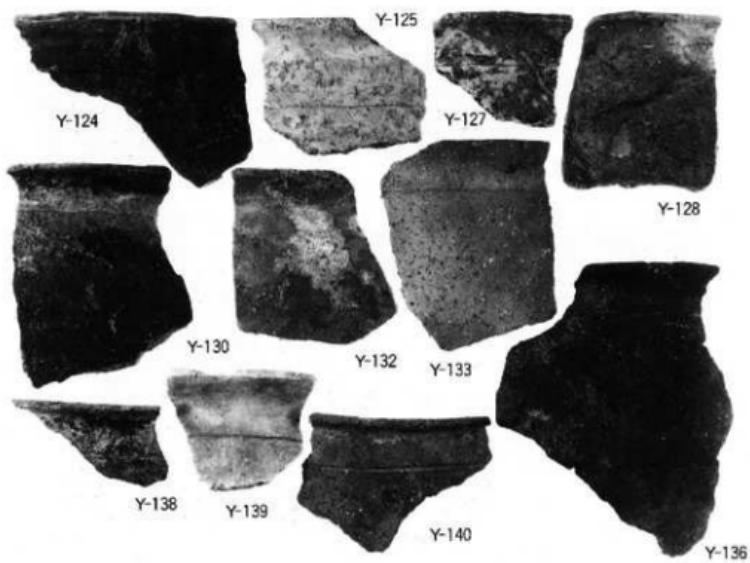
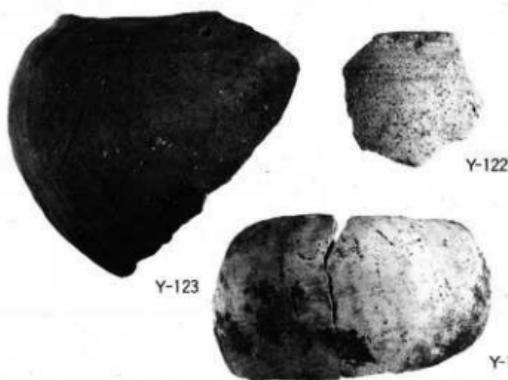
弥生土器(壺)



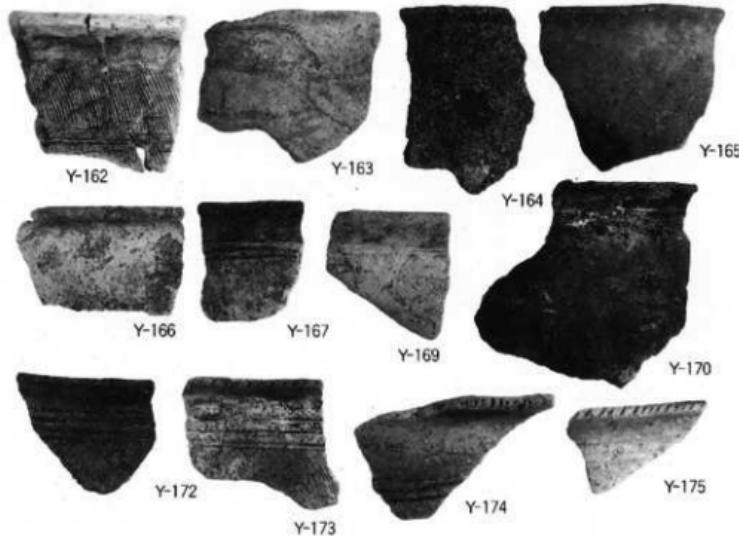
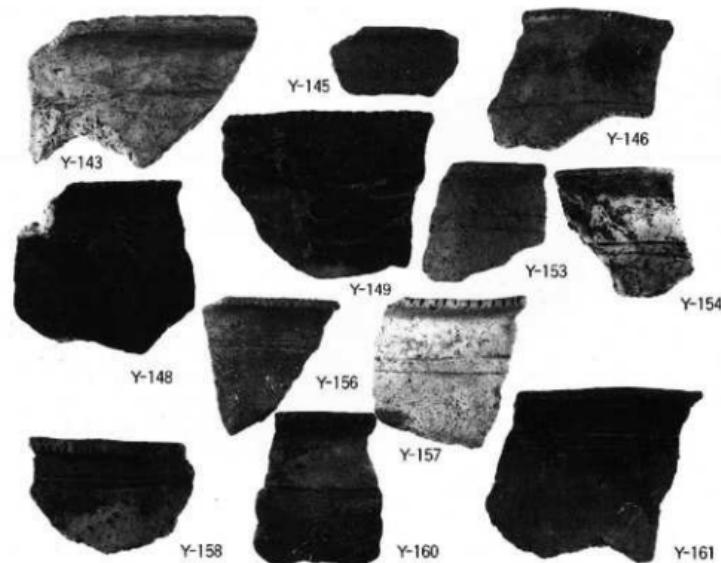
弥生土器(壺)



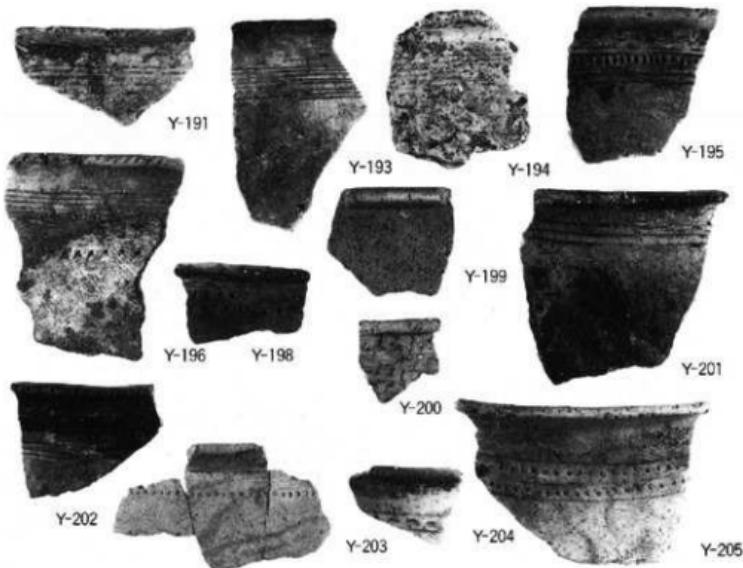
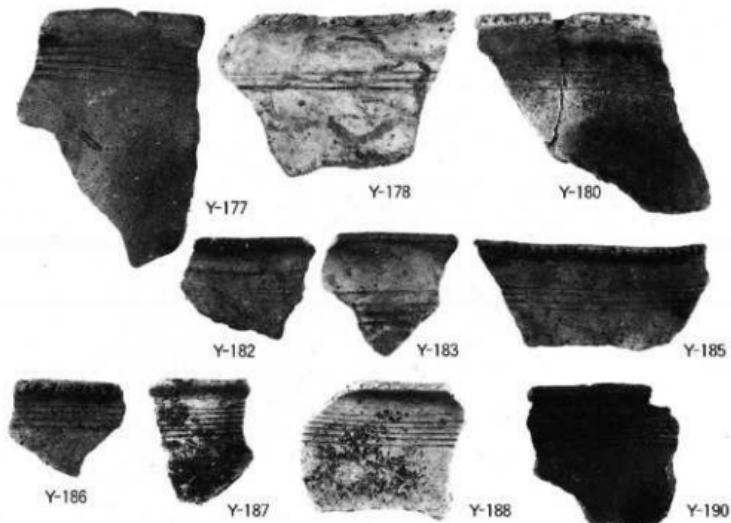
弥生土器(壺)



弥生土器(無頭壺・甌)



弥生土器(斐)



弥生土器(壺)



Y-192



Y-208



Y-209



Y-210



Y-211



Y-212



Y-213



Y-214

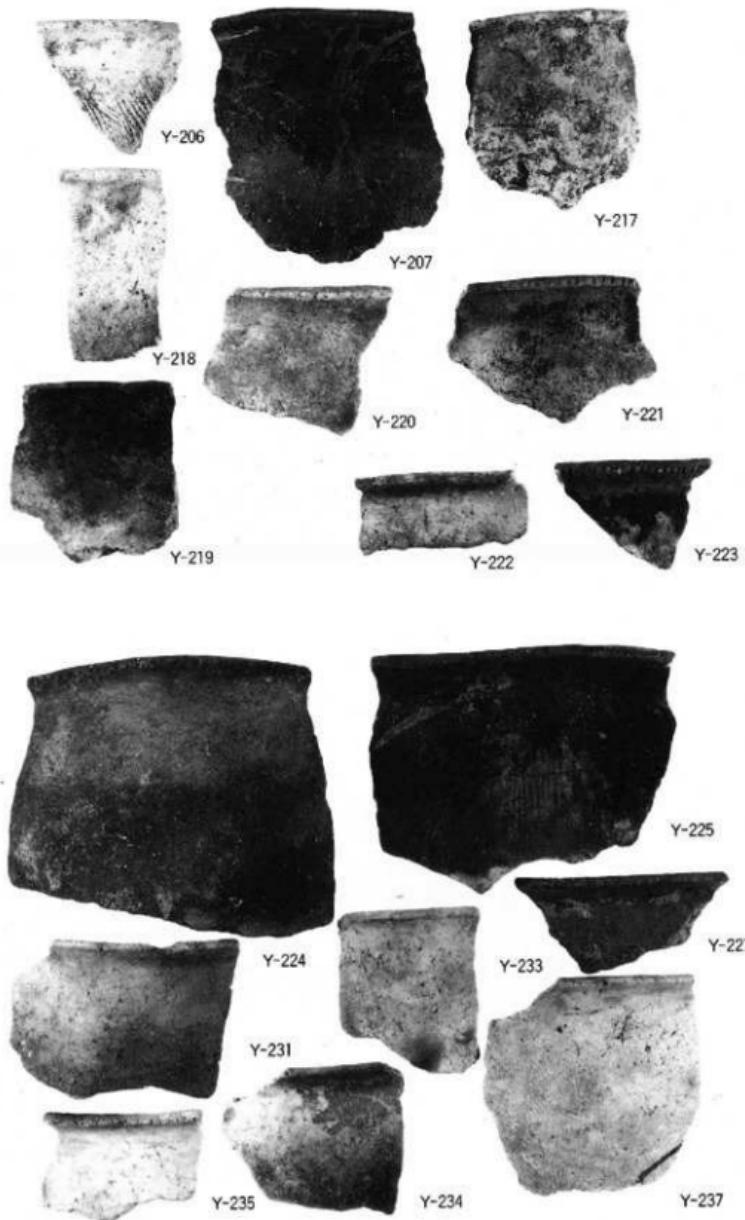


Y-215

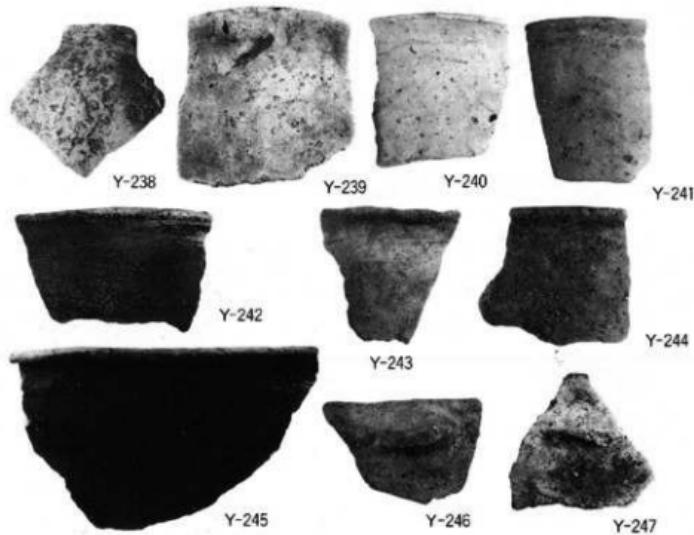


Y-216

弥生土器(甕)



弥生土器(斐)



弥生土器(鉢・蓋)



Y-256



Y-256



Y-265



Y-266



Y-265



Y-266



Y-257



Y-254



Y-265



Y-255



Y-258



Y-261

弥生土器(底部)



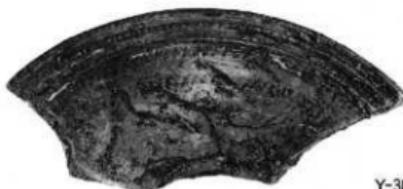
Y-275



Y-276



Y-279



Y-301



Y-269



Y-270



Y-272



Y-261



Y-281



Y-282

Y-283



Y-273



Y-285



Y-286

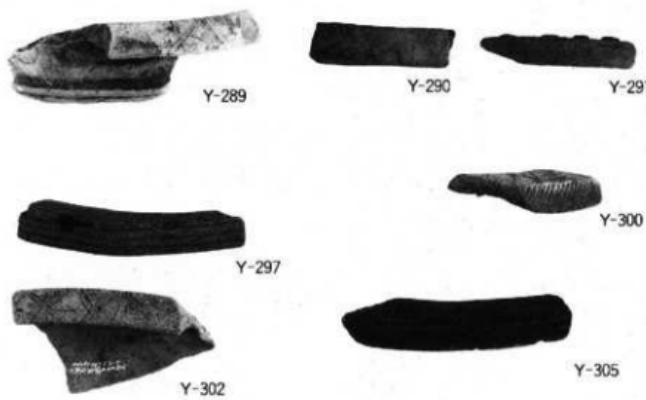
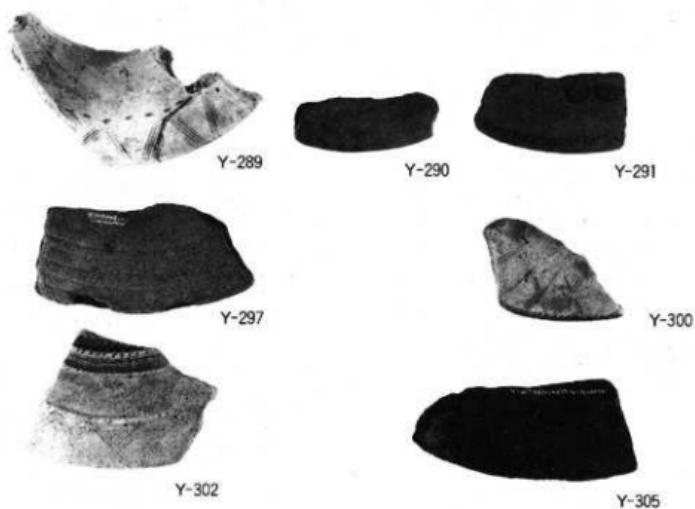


Y-287



Y-288

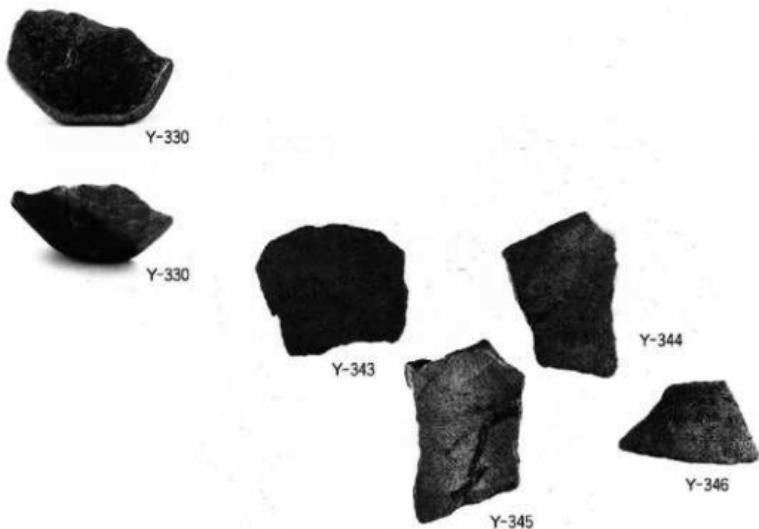
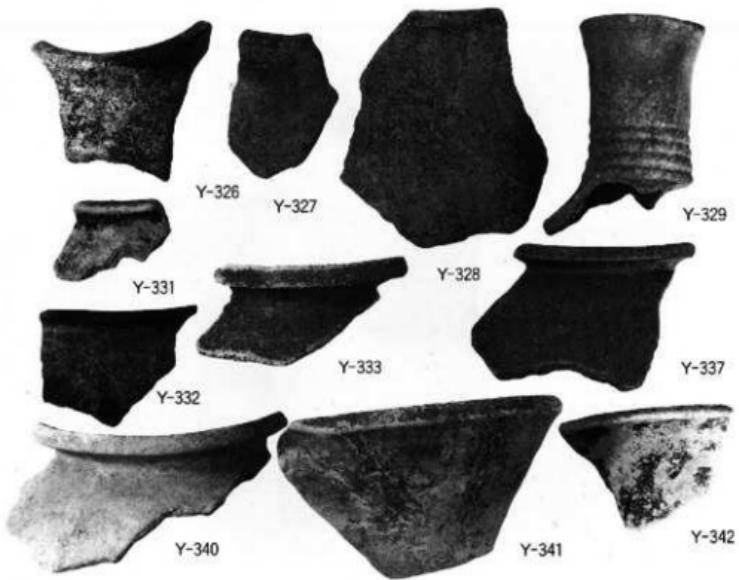
弥生土器(壺)



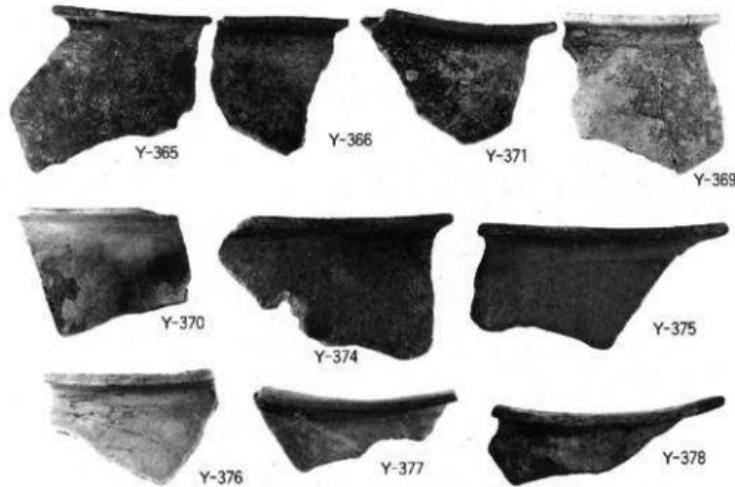
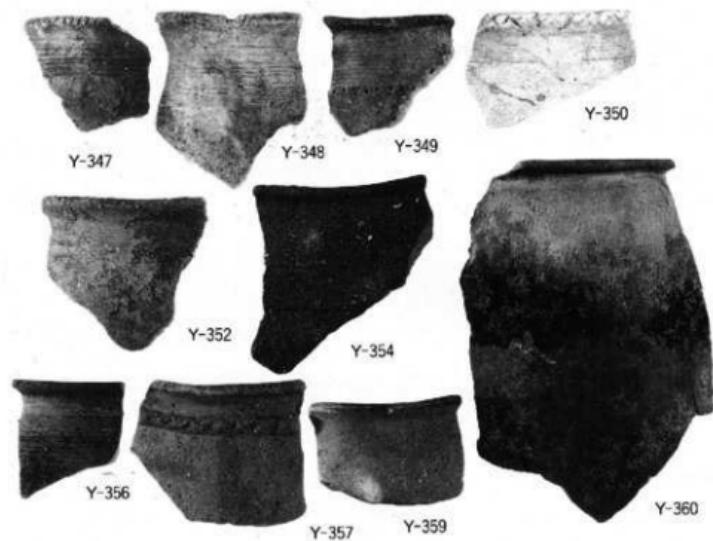
弥生土器(壺)



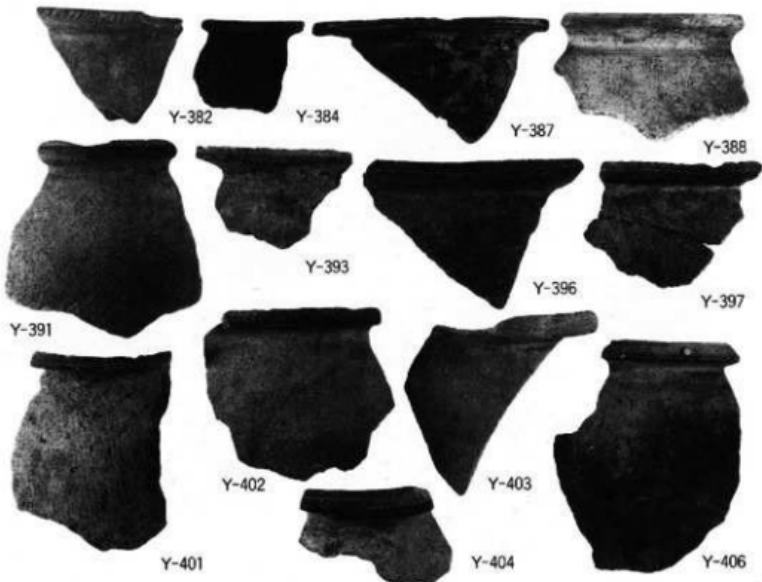
弥生土器(壺)



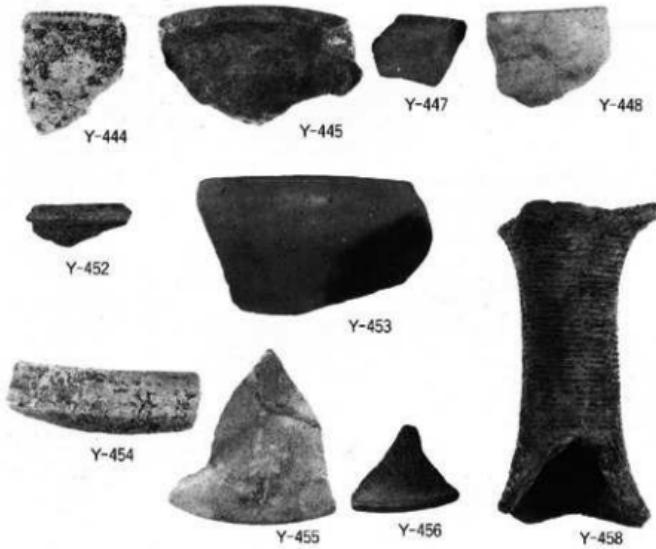
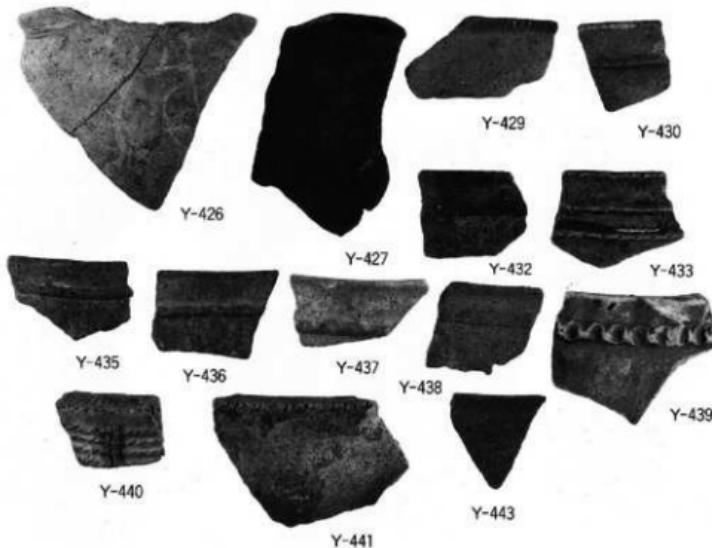
弥生土器(壺)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(鉢・高坏)



Y-451



Y-457



Y-463



Y-469



Y-470



Y-459



Y-472



Y-464

Y-461



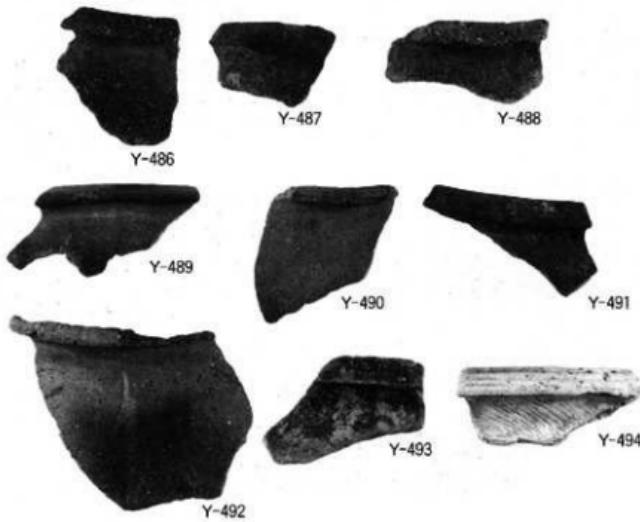
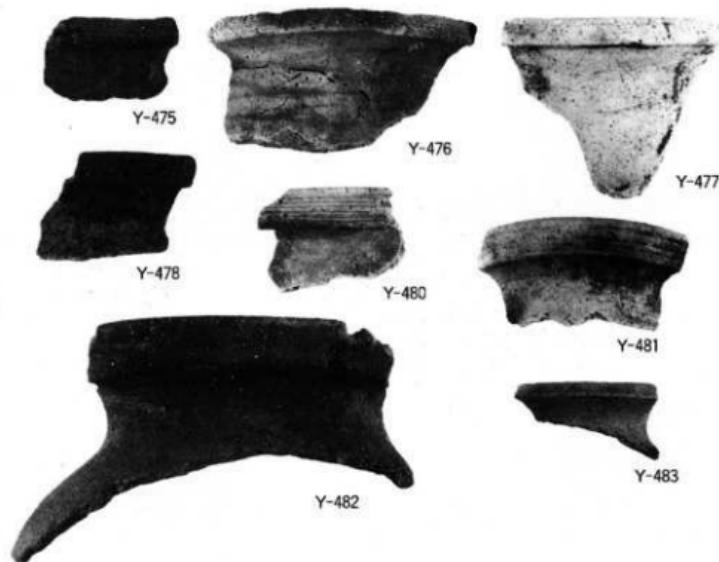
Y-471



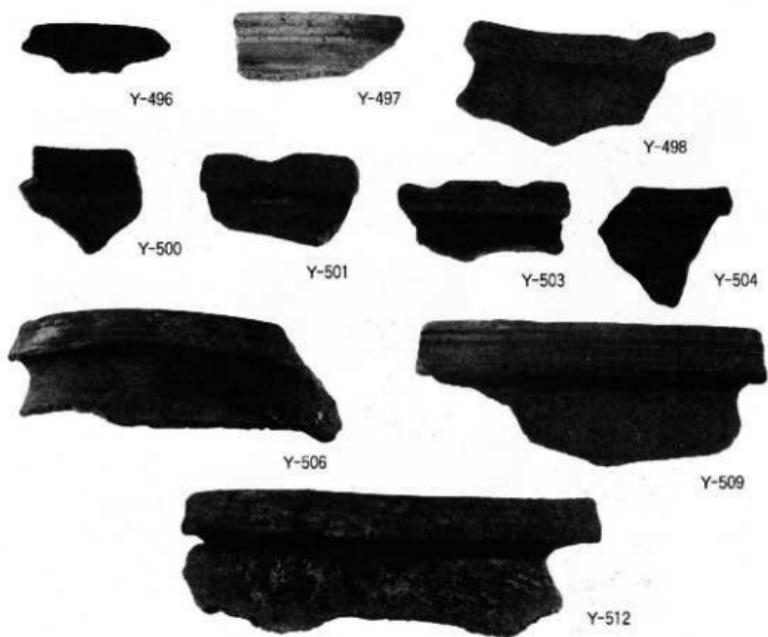
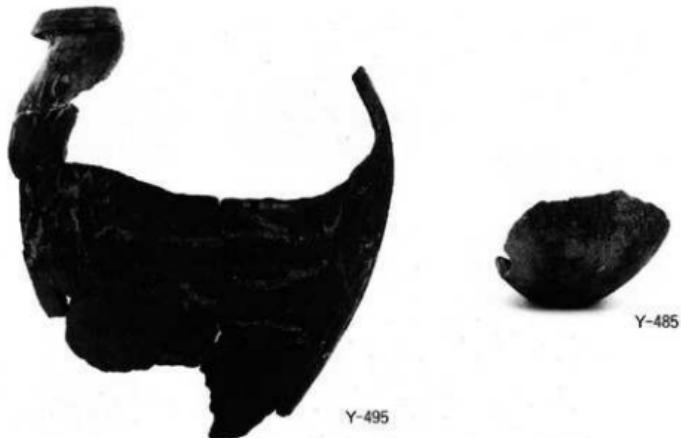
Y-467

弥生土器(高坏・底部)

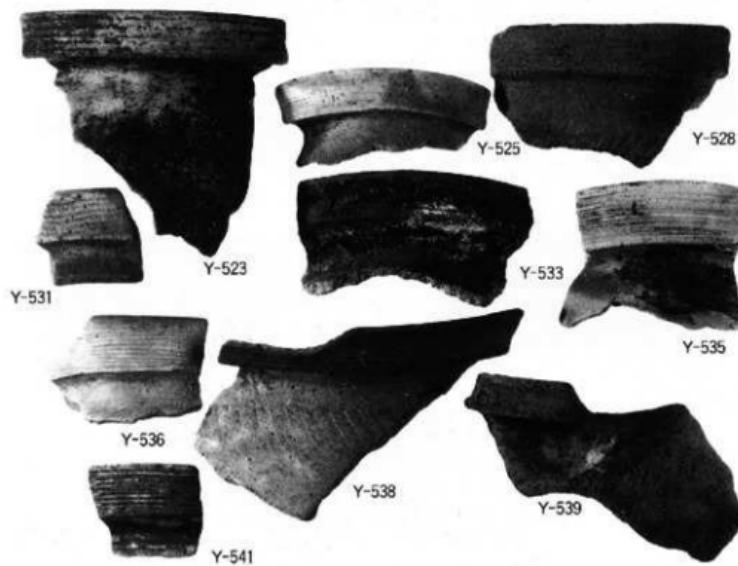
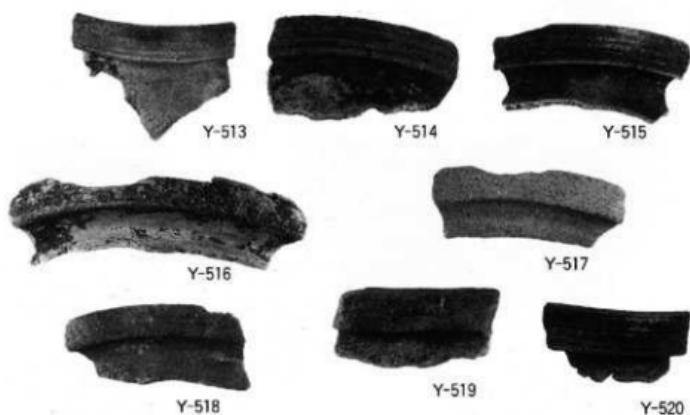
図版36



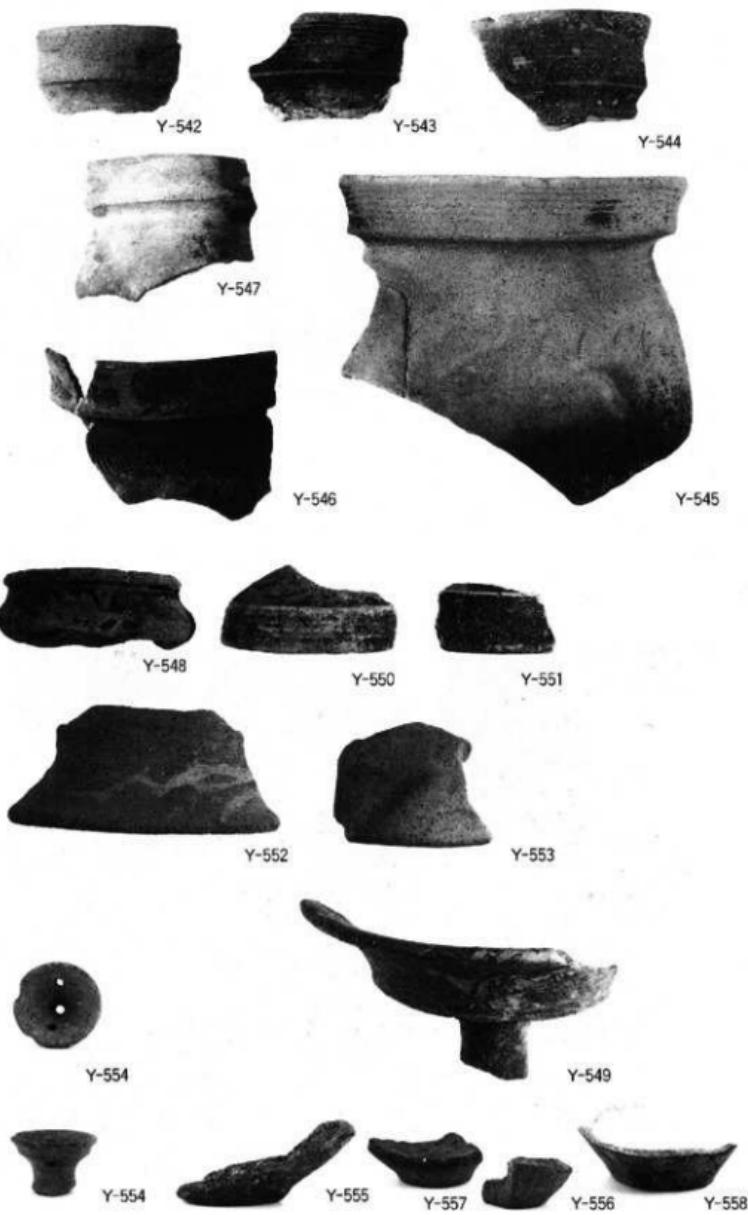
弥生土器(壺・甌)



弥生土器(壺・甌)



弥生土器(斐)



弥生土器



H-1



H-17



H-11



H-2



H-3



H-4



H-5



H-6



H-9



H-10

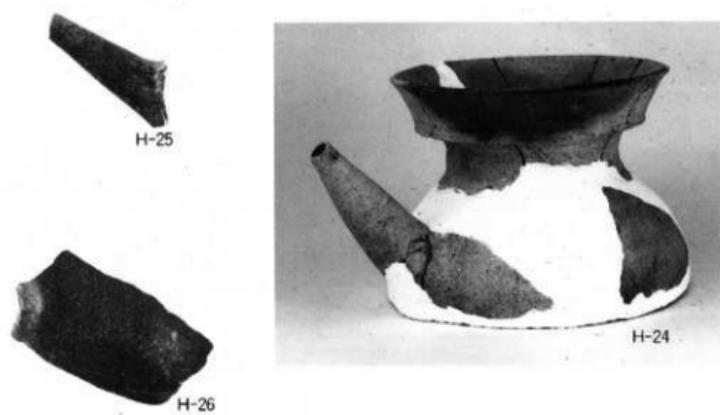
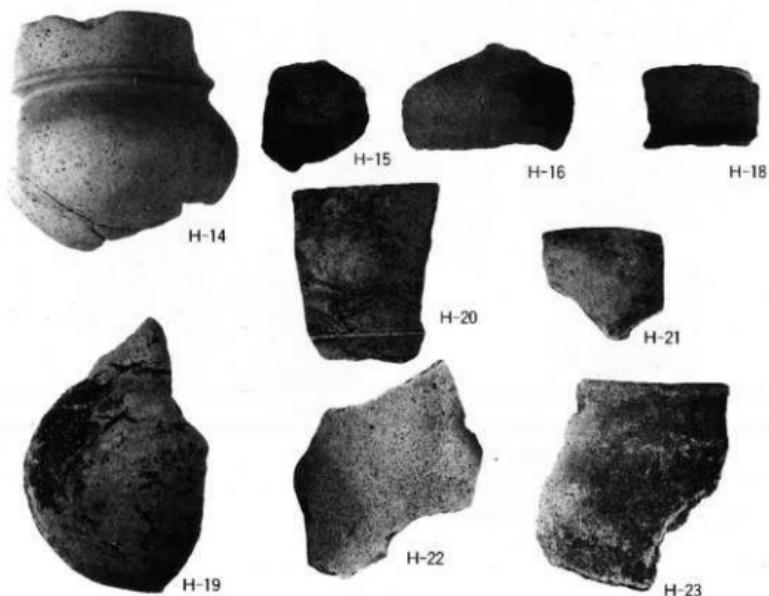


H-12



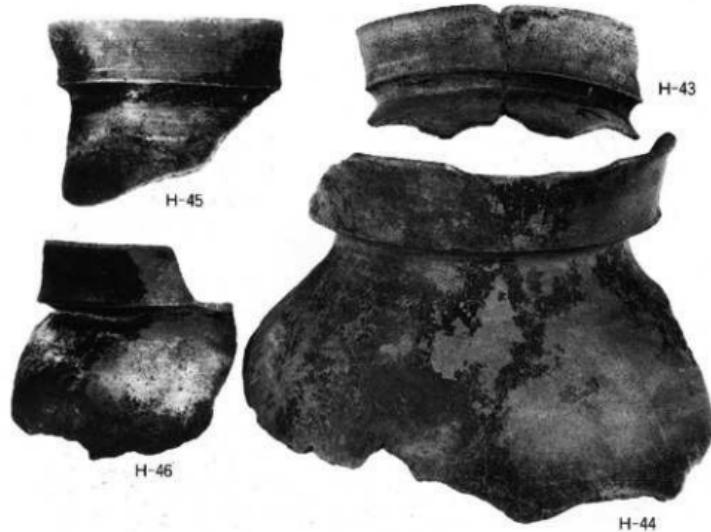
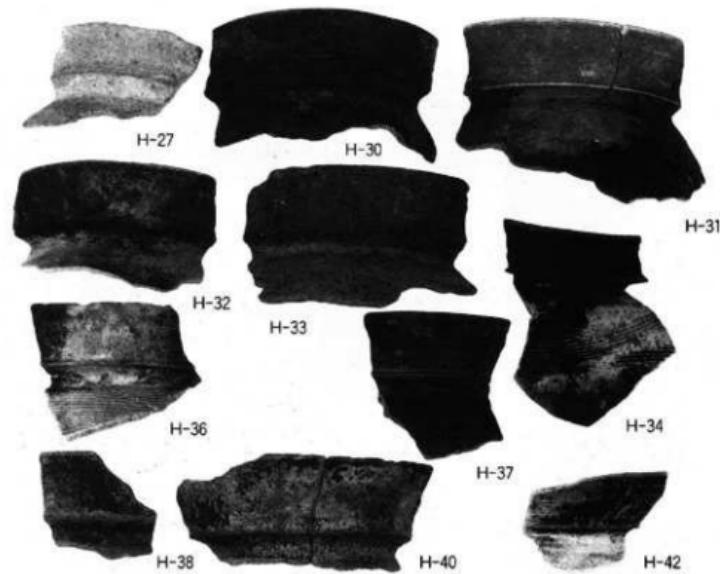
H-13

土師器(壺)

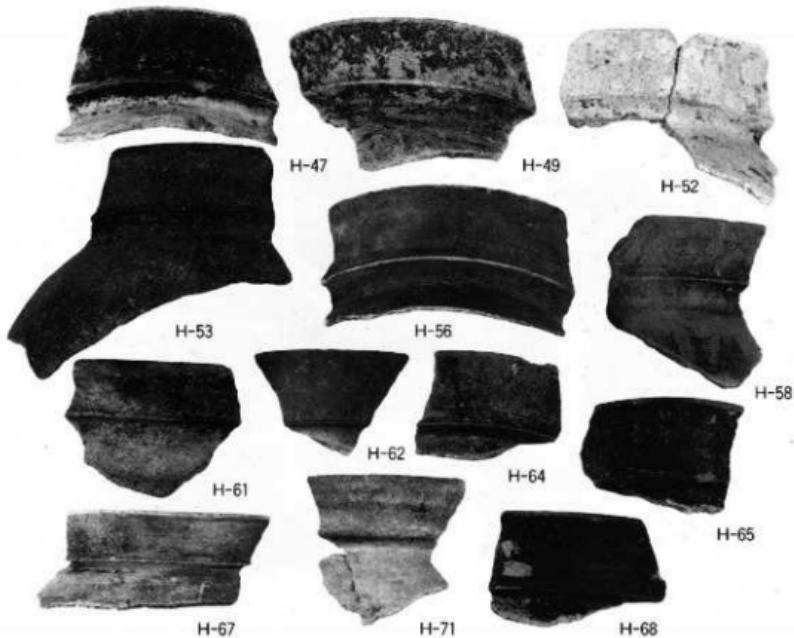


土師器(壺・注口土器)

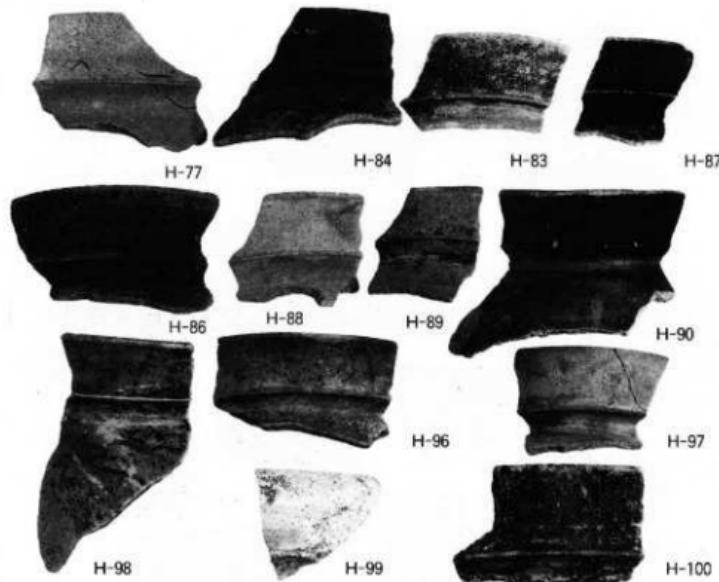
図版42



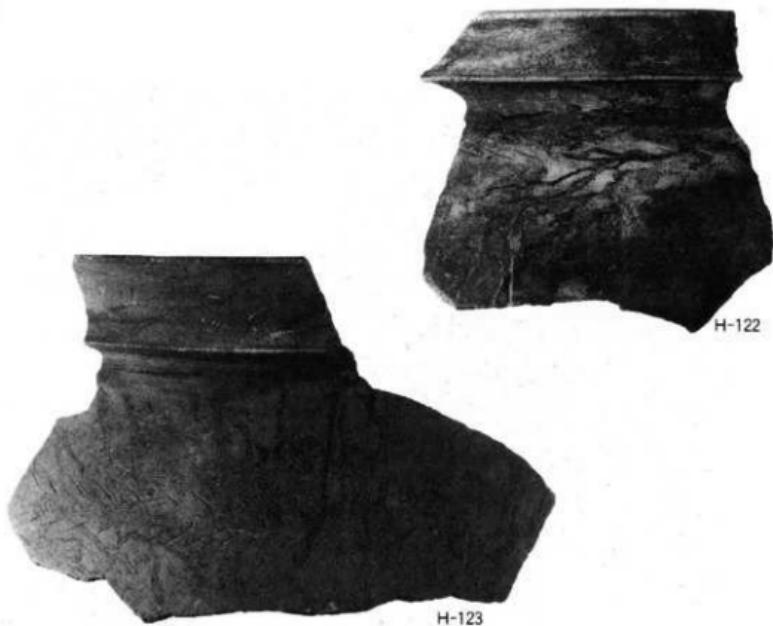
土師器(甕)



土師器(甕)

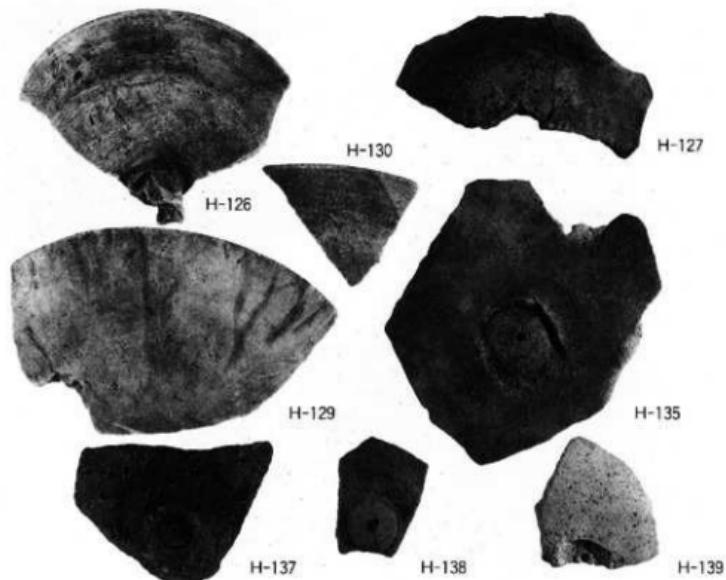
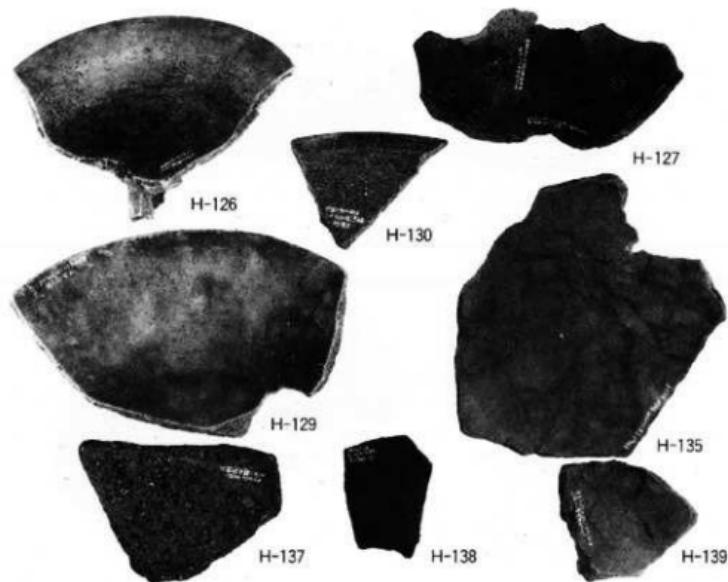


土師器(甕)



土師器(甕)

図版46



土師器(高坏)



H-143



H-144



H-145



H-146



H-140



H-141

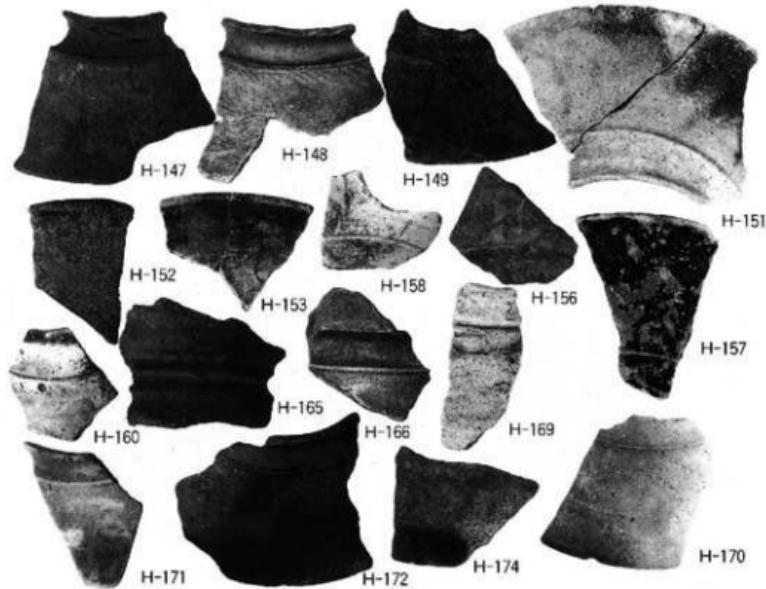


H-142

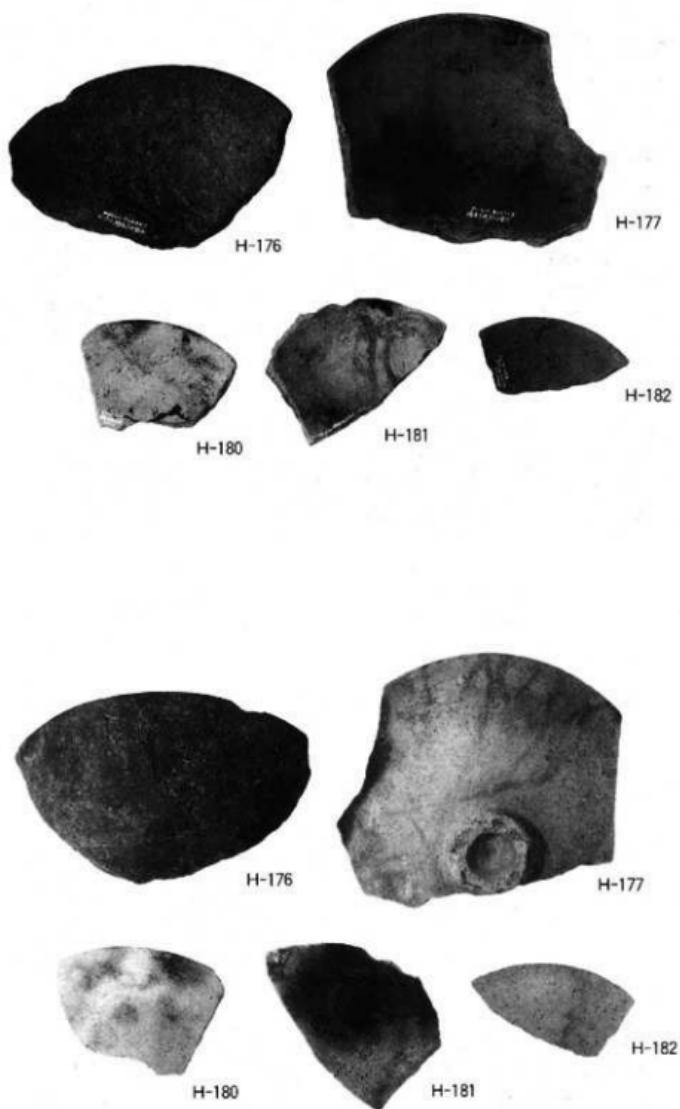


H-150

土师器(高坏·器台)



土師器(鼓形器台・低脚坏)



土師器(低脚壺)



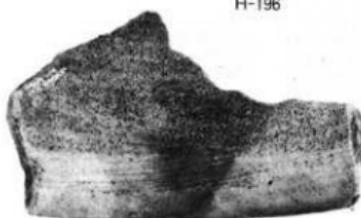
H-197



H-198

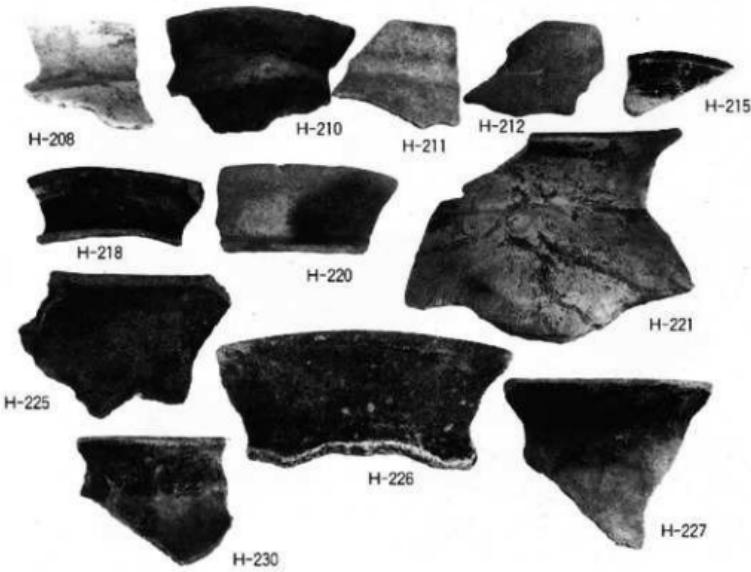
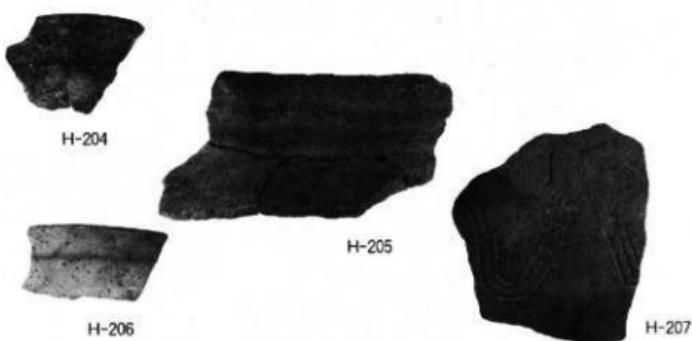


H-196



H-199

土師器(瓶形土器)



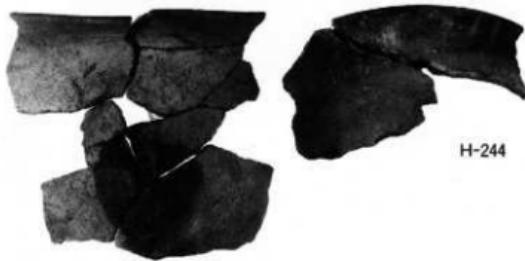
土師器(甕)



H-219

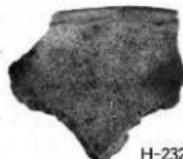


H-229



H-244

H-239



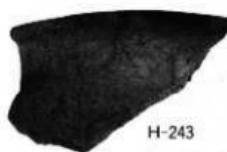
H-232



H-234



H-235



H-243



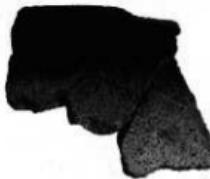
H-245



H-246



H-247



H-248



土師器(高坏・坏)



H-271



H-270



H-272



H-273



H-274



H-270



H-272



H-273

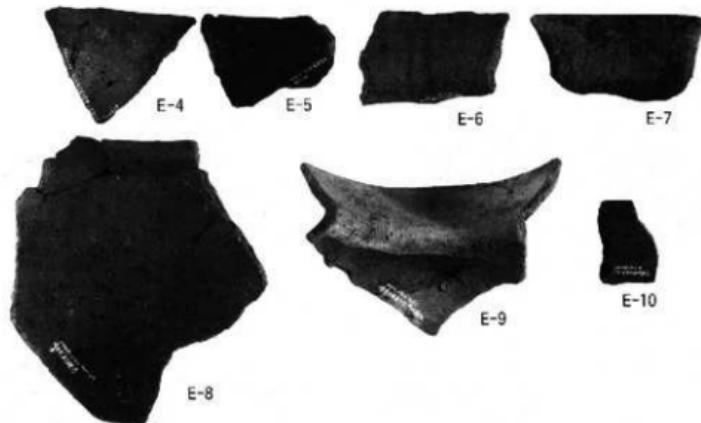
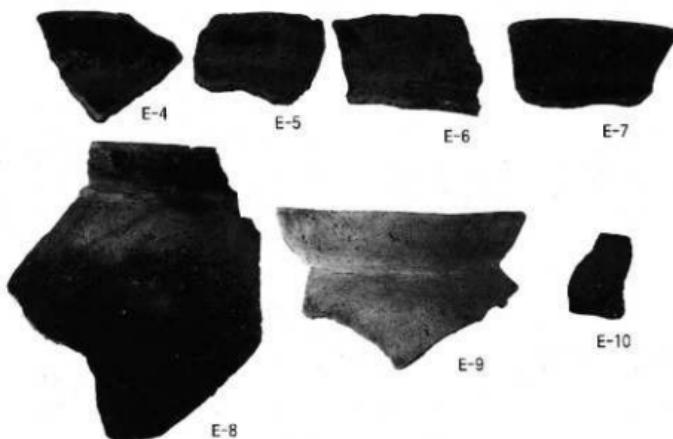


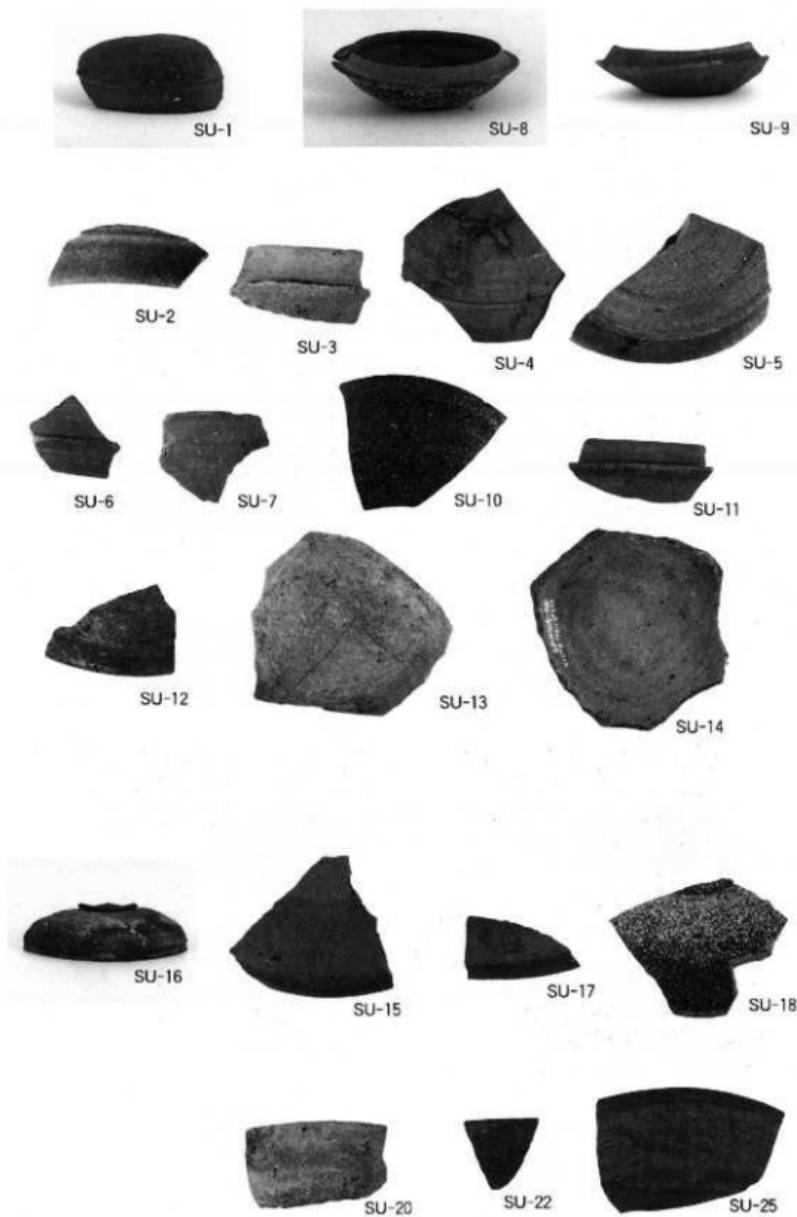
H-274

土師器(瓶・かまと)



近畿系土器・瓦質土器





須恵器(蓋・壺)



SU-19



SU-24



SU-23



SU-21



SU-26



SU-27



SU-28



SU-29



SU-30



SU-32



SU-35



SU-36



SU-38



SU-39



SU-40

須恵器(坏)



SU-42



SU-43



SU-46



SU-47



SU-49



SU-51



SU-53



SU-44



SU-45



SU-54



SU-57



SU-55



SU-52



SU-56

須恵器(杯)



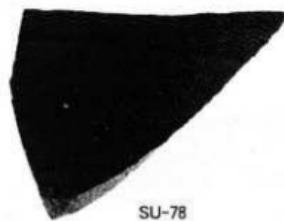
須恵器(長頸壺・広口壺)



須恵器(皿・盤・碟・甕)



SU-77



SU-78



SU-79



SU-80

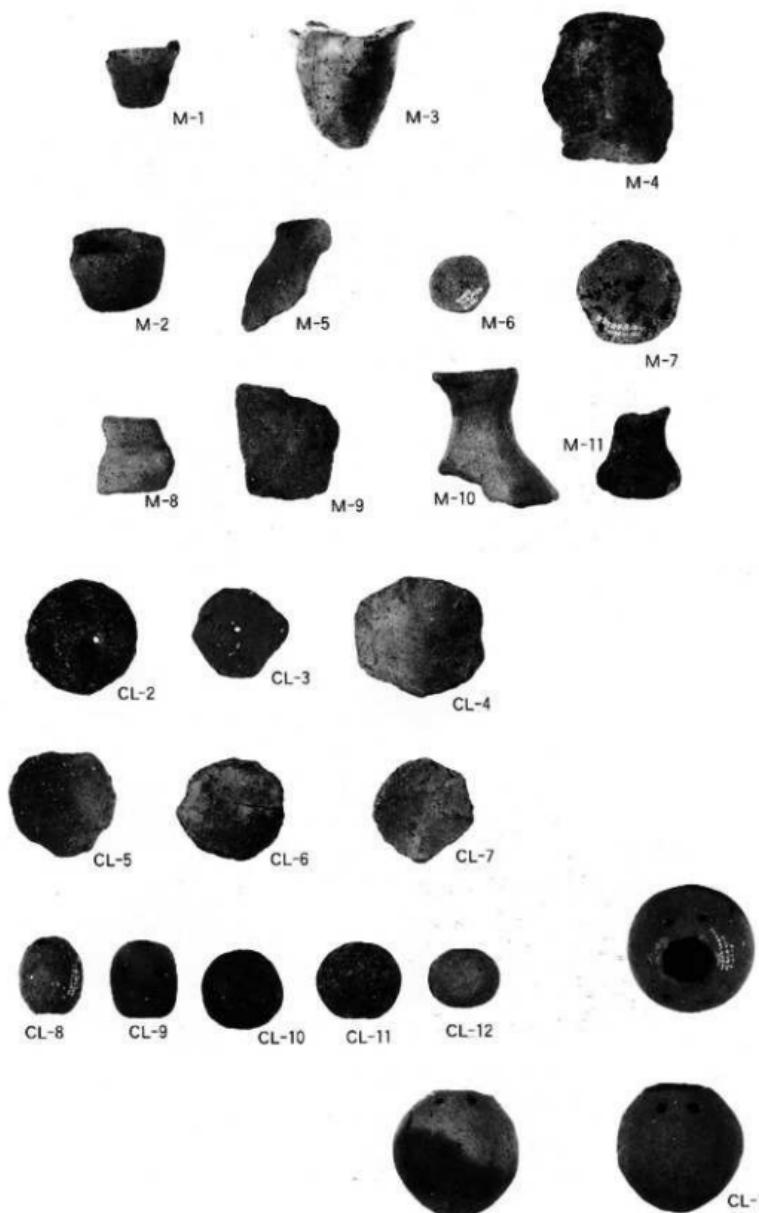


E-14

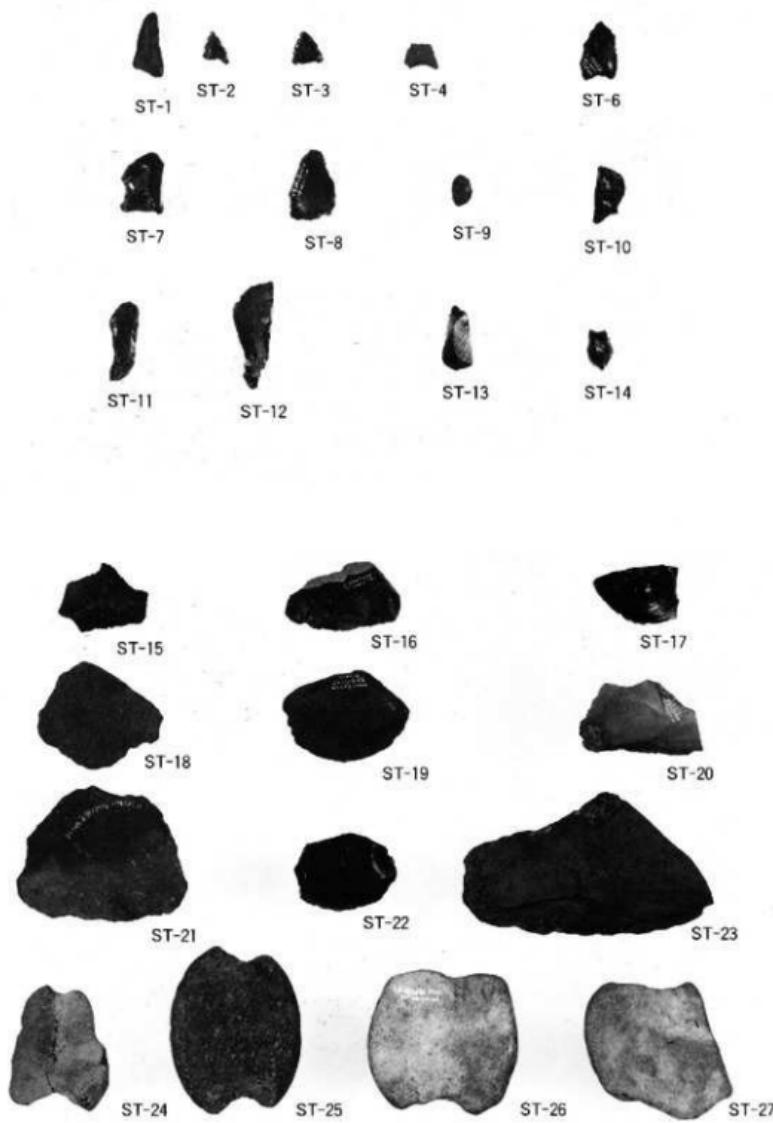


E-15

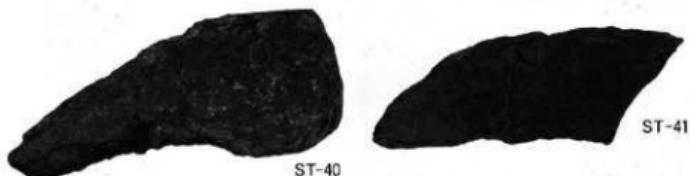
E-16



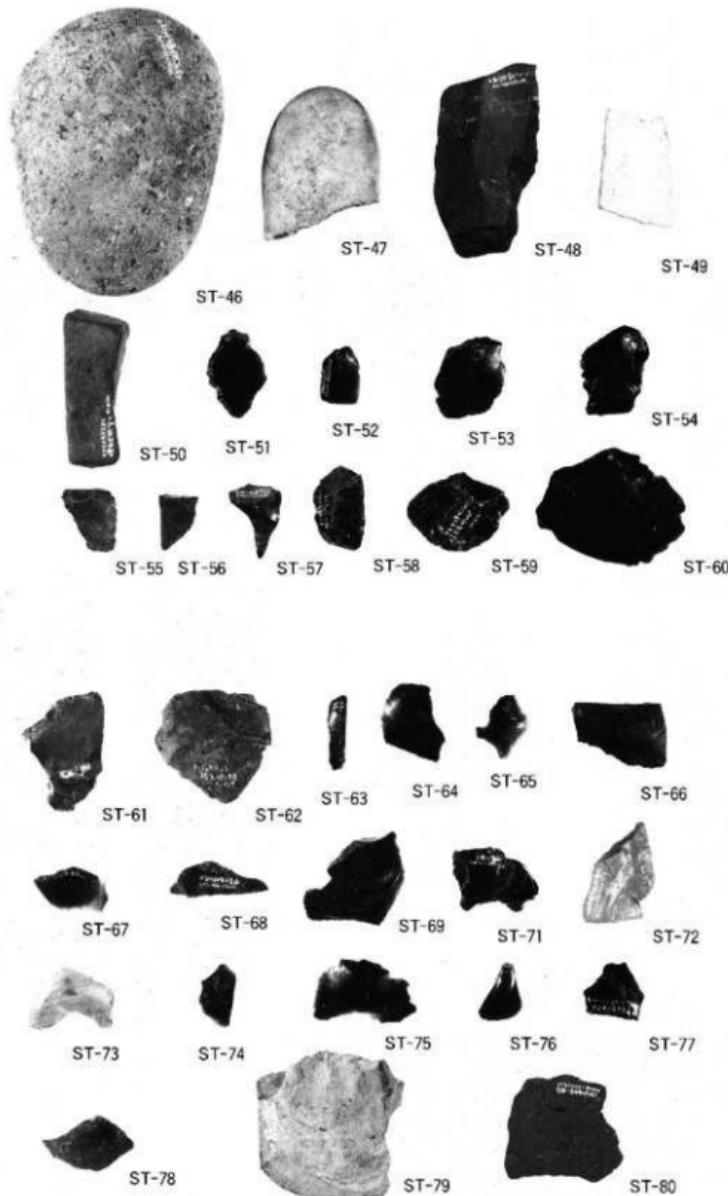
ミニチュア土器・土製品



石器



図版66



石器



W-1

W-2

W-3

木製品





W-7



W-9



W-8



W-12



W-10



W-13



W-14



W-16



W-18



W-19



W-20



W-21

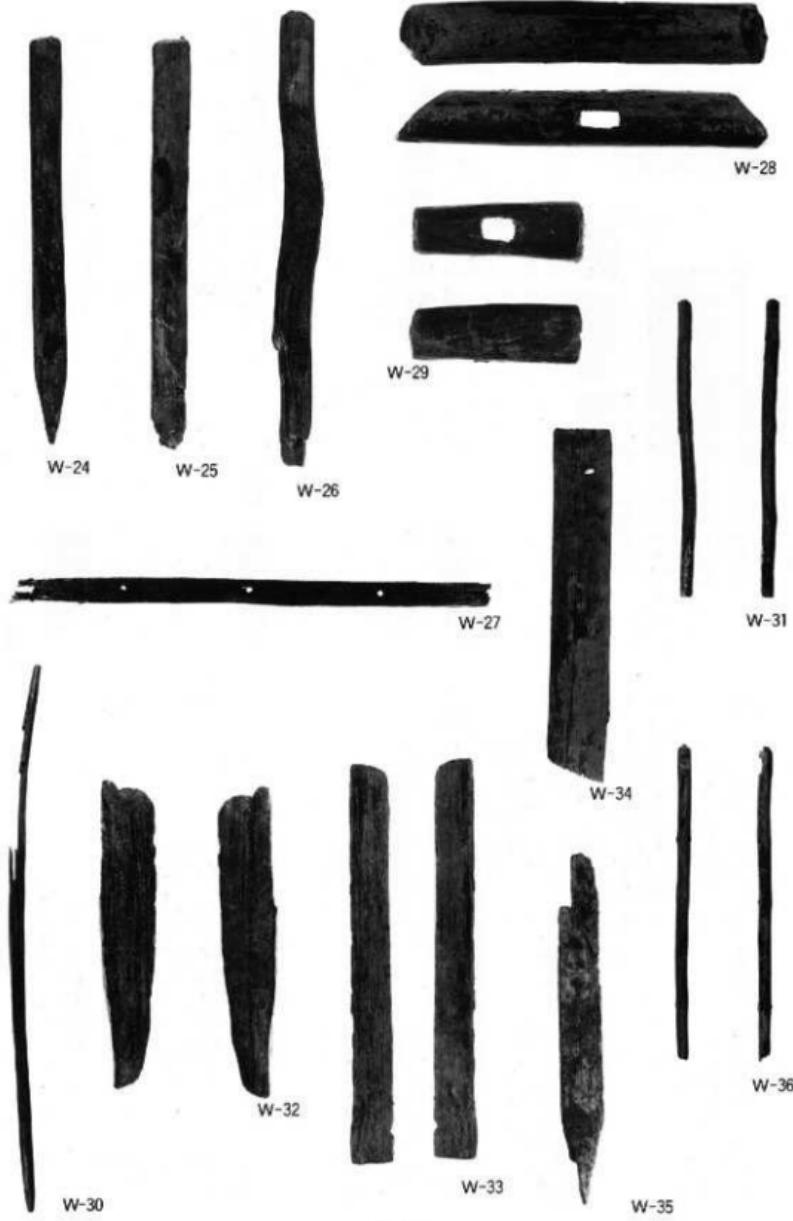


W-22



W-23

木製品





W-37



W-38



W-40



W-41



W-42



W-44



W-39



W-43



木製品

図版72



W-45



W-48



W-51



W-46



W-49



W-59



W-47



W-50



W-52



W-54



W-55



W-58

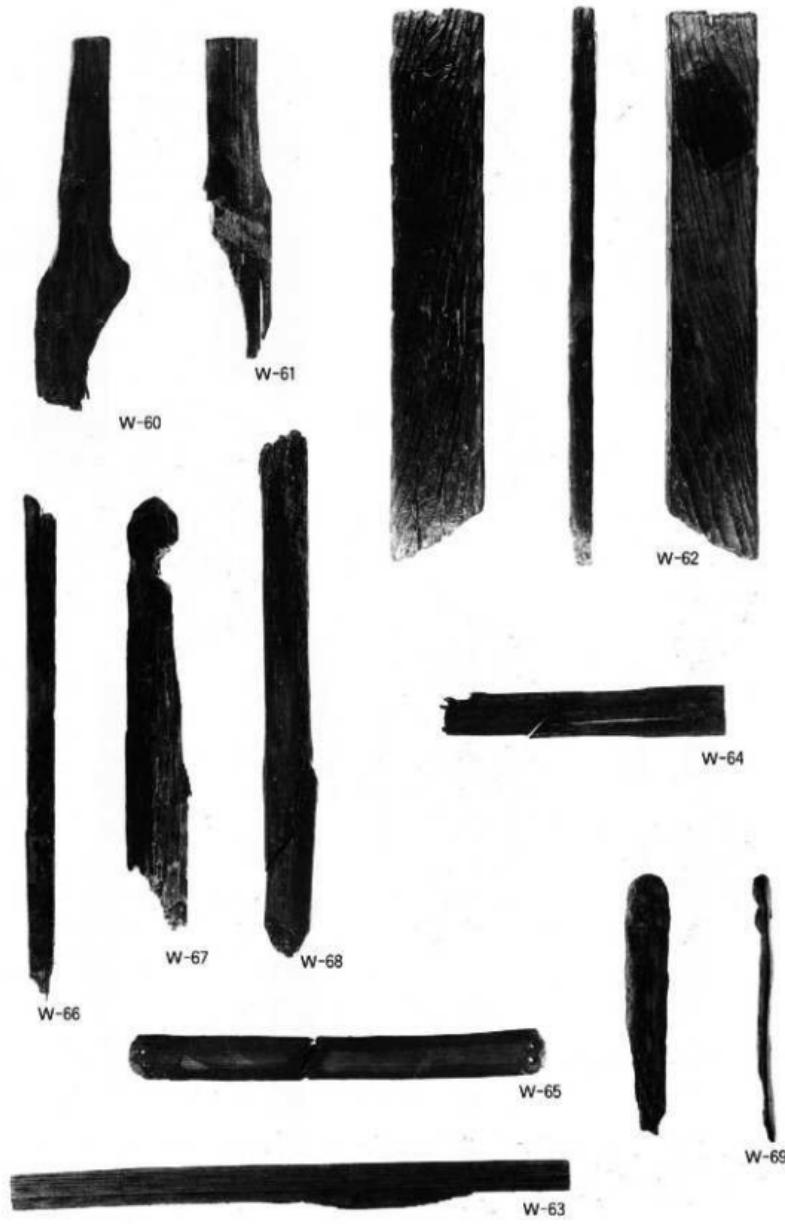


W-56



W-57

木製品



木製品



W-70

W-71



W-72



W-73



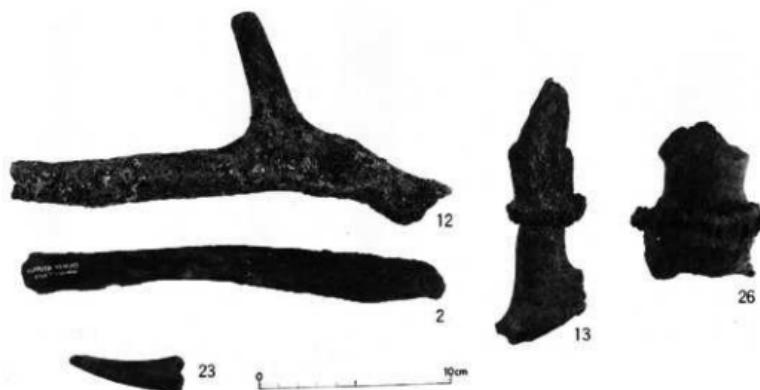
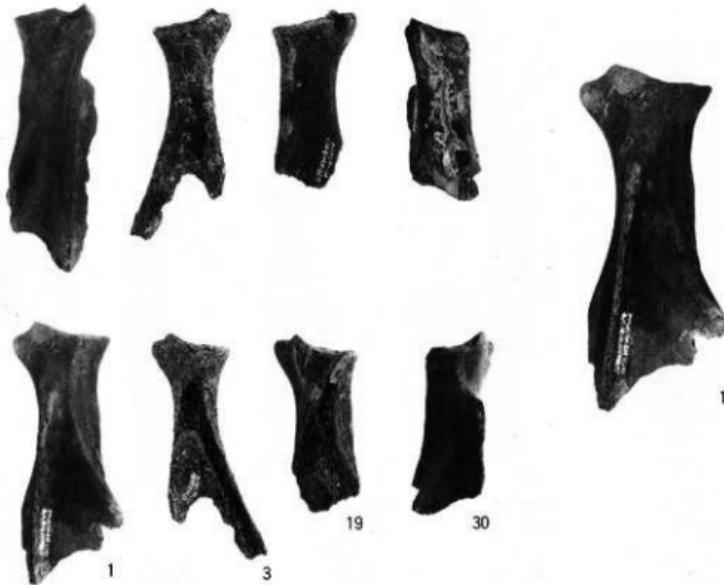
W-74



W-75



木製品



獣骨(シカ)



25



17



10



9



21



27



24



15

黙骨(シカ)



18



28



6



8



14



5



21



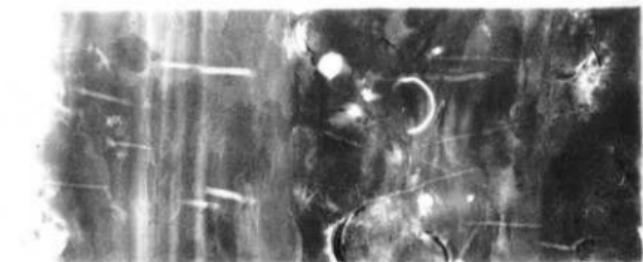
7



11

T-910802

2



T-910802

4

